

# フランス語表現方法に於ける(Langage の構造)精神言語活動について

Sur la Structure du Langage (Activité psycholinguistique) dans les Expressions françaises

—自己組織系のシステム言語学への試論(1)—

Essai de Linguistique systémique (1)

三 石 博 行, Van Drom Eddy

フランス語表現方法に於ける(Langage の構造)精神言語活動について  
Sur la Structure du Langage (Activité psycholinguistique) dans les Expressions françaises

－自己組織系のシステム言語学への試論－(1)－  
Essai de Linguistique systémique (1)

三石博行, Van Drom, Eddy \*

はじめに・科学技術人間社会学と言語学の学際的研究の経過

0-1、フランス語表現方法の分類作業

1980年の頃、フランス語表現に関する分類は、いくつかの参考書があったが、体系的なものはなかった。そこで、フランス語を使って研究していく中で自分なりのフランス語表現の分類を始めた。読んでいる文章の中に出てくる表現をカードに一つ一つ記入した。それらのカード集合を、参考書などで分類された表現方法の項目に分けた。しかし、分類にあてはまらないカードが沢山できた。分類のカテゴリーを考えなければ分類作業は進まなくなつた。形式論理学で規定しているカテゴリーも分類項目に入れたが、それでも分類できないカードが残った。論理的表現項目で分類できないカードを、新しいカテゴリー、例えば、状態、強調、空間や場所、程度や具合、時間、量や数、質、限度や限定、可能性や希望等々を加えることで、さらに分類を進めた。

分類したカードを1995年に、「フランス語の表現方法」という309頁の冊子に纏めた。21の分類項目ごとに、類似した表現を纏め、それらの表現方法を用いた例文を加えた。この冊子に記録されている全ての用法のインデックスを作成したり、用法の具体的な例文の発音を録音し冊子の音声版を作ったりして、フランス語で研究している私自身のために活用した。しかし、分類した表現方法と活用例を言語学的な研究の対象として分析することはしなかった。

0-2、科学哲学的課題の中での言語学

現代科学の科学性や近代合理主義の科学批判を進めるために科学哲学の課題を企画した。その過程で言語学との学際的研究の必要性は二つの側面から課題になった。

科学の文化的歴史的要素の解釈やイデオロギーとしての側面の分析は、すでにそれまでの科学論の中で語られていた。科学史や科学社会学などの研究を経て、1980年以来、フランスのポスト構造の視点に立ち、精神分析学の公理・精神経済のモデルとコミュニケーション発生論から理性的思惟・科学論理の起原や、言語を規定する精神構造・文化構造の相補的性質の分析が課題になるため、ソシュール構造言語学や精神分析学の学習が必要となった。

現代科学哲学を展開するために、科学的合理主義や実正主義に対する現象学的批判の視点を再点検することになった。認識論の課題が、対象認識を通じての主体認識と主体認識の解釈からの対象世界の認識のシステム的関係として問題にされた。このシステム認識論を通じて、対象認識の中に自然発生する科学的公理とよばれる固定観念と主体認識の中に自然発生する哲学的批判とよばれる知の非在性の相互批判運動として、反省が確立することを示した。

現代哲学の存在理由を反省学として位置付けるためには、近代的自我の確立の原点となるコギトの成立条件に関する研究が必要となり、デカルトのコギトやそのカントの解釈への批判や現象学的解釈などに関して研究を続けた。ヒンティカなどのアメリカ分析哲学やヴァットゲンシュタインなどの論理実証主義の解釈に対する批判的検討を経ながら、ラカンが提起するコギトの言語問題にたどり着き、また再び、言語学の学習が課題になった。

0-3、科学認識論批判から言語学研究方法への問題提起

科学をする行為や科学的思惟をフロイトのいう第二過程の形成と現実則を起原とする精神活動であると解釈する

・ 阪南大学非常勤講師

ことで、フロイト精神分析学の公理が科学行為分析に適用できるという仮定が成立し、フロイト精神分析学の科学哲学への解釈の権利問題が成立したと考えたのだが、学際的研究では、ある公理系の中で確立している定義を他の公理系や分野の説明に無条件に応用する権利問題が常に科学認識論的に課題となる。

フロイトは臨床精神医学の中で精神分析学を構成する仮説や理論を確立した。精神分析学は、具体的な精神病理的現実のそれに苦しむ患者に対する治療行為、臨床的行為のために、実践的な力としての精神分析の解釈や仮説と呼ばれる知を構築したのであるが、精神病学的臨床行為を前提にしない科学哲学が、フロイト精神分析学を援用しその理論を確立するために、その援用の権利問題に答えなければならない。

この権利を確立するために、まず、科学するという行為が日常生活の中で行っている現実的な考え方や理性的な行為と同次元の精神的な活動であることが前提になる。その上で、フロイトの精神分析学の精神経済活動の公理（経済の理論）を使って、理性的思惟の起源の解釈の可能性を検討する。現実則の理論で理性的思惟の精神活動が説明できるなら、フロイト精神分析学の公理を「科学する行為」の分析に拡大することができる。

科学的思惟を構成する論理、計量的言及、実証的方法などこれまでの科学哲学の課題を、精神分析学を土台とする人間学の学際的領域に持ち込むことができる。つまり、科学認識論がこれまで分析の対象にしていた「科学する行為」を、フロイト精神分析学を土台とする人間学の対象として位置付けることが可能になる。具体的にはフランクフルト学派、唯物論的文化人類学やポスト構造主義が既に試みたように、理性的思惟に関する文化人類学的な解釈が成立することになる。このような学際的研究によって科学哲学の課題はその研究の手段や分析の視点を拡大する。そして、科学認識の文化人類学的研究の新たな分野を開拓するのである。

このように、ある体系の公理を他の分野に展開する権利問題を解決することで、人間社会学の研究にとって学際的研究方法は、既成の研究方法に新鮮な切り口や解釈の可能性を持ち込む。ここで問題になるのは、言語学の公理系を科学哲学の中に持ち込む権利問題である。この権利問題はまだ成立していない。

一つの具体的な生活世界を対象として成立する人間社会学の知の拡大解釈は、その知の成立の背景や根拠を継承していかなければならない。歴史学批判の中で仮定された唯物弁証法を自然現象の説明に用いたエンゲルスの「自然の弁証法」をサルトルは批判したが<sup>1</sup>、その批判の視点は、ある科学的公理系を他の分野の公理系の中に持ち込もうとする学際的研究、特に人間社会学の学際的研究の中で、常に問題になる。また、すべての科学の基礎を自負する哲学にも当てはまる課題である。哲学はこれまで、哲学的論証の都合に合わせて諸科学の公理を哲学の証明に安易に活用する傾向を持っているので、哲学的方法論に対する批判が、この課題に込められている。

フロイト精神分析学のみならずソシュール言語学の公理が、反省学としての科学哲学の構想システム認識論の展開のために援用する権利問題が問われている。認識論はその権利問題を解明するためにあり、科学的公理が依拠する世界(自然・人間・社会)の認識構造を理解するためにある。言語学の公理の無断援用を防ぐには、言語学の中で確立している公理を正確に理解する作業が必要である。

科学技術哲学を展開するための言語学的解釈の必要性から、哲学研究の作業として二つの課題が生まれる。つまり、一つは言語哲学の研究の視点から問題にされている課題の抽出作業で、具体的には、ソシュール構造言語学、ラカンの精神分析学やヴァットゲンシュタインの言語ゲームの概念を研究を進めるなかで、哲学的にフロイトのシステム論的解釈から導きだされた仮説を検討すること、もう一つはシステム認識論や科学哲学としての反省学的方法論の公理を具体的な言語分析、特に科学表現や論理的表現についての言語学的分析を通じて、言語学の公理系の中で確認し実証することである。

反省学やシステム認識論の立場に立って、科学哲学の課題として言語学のテーマを取り上げた時、その研究の方法を巡る課題が問われ、言語学研究の課題が提起された。

#### 0-4、フランス語表現の分析作業を通じての言語学モデルの形成

1995年になって、当時大阪大学理学部物理学部大学院で天文物理学を研究していたEddy VAN DROM氏と、再び、フランス語表現に関する研究に取り組むことになった。Eddy VAN DROM氏が科学フランス語を教えるために1994年に作成した教材「科学フランス語表現方法」と1985年にまとめた「フランス語の表現方法」を参考にし、さらに辞書や資料分析をしながら、分類されたそれぞれの表現法項目に当てはまる用法を付け加えた。この分

類作業を通じて、「フランス語の表現方法」の分類を批判的に検討し、1996年12月に、新しい分類項目ができ上がった。

新しく分類されたフランス語表現では、三つの要素が表現構造の基本をつくると考えた。一つ目は話し手の立場によって決定される表現の仕方・様態(Modalité)で、二つ目は論理的要素(Relations Logiques)、三つ目は説述的表現要素(Discours Explicatif)である。それらの三つの基本的な表現要素は、幾つかの構成要素によってでき上がっており、その構成要素のテゴリーを分析することになる。つまり、表現は、三つの基本的な表現要素に所属する異なる三つの構成要素の配列によって作られている<sup>2</sup>。この分析は意味論的な視点に立ったものである。また、表現方法の分析である以上、意味論的な分析が第一番目の視点にくる。統辞的要素を使って意味論的な分類を進めるための材料とし、我々の独自の表現用法分類表ができあがった。

意味論やこの表現方法の分類と分析の中から、異なる論理的要素や違う意味に同時に使用される一つの用語が見つかった。一つの用法が幾つかのちがう表現方法のカテゴリーに結合している言語現象は、歴史言語的な視点から観ると、ある意味をもつ一つの言い方が時代とともに変化し、他の意味として使われるようになった言語現象から説明される。現在の表現方法の分析に限定すれば、言語現象の現在的な側面しか理解できない。それに発生的な視点を持ち込むことで、言語表現の時代的な変化を理解することができる。

論理的要素を形式論理学的な視点を持ってば、意味するものと意味されるものとの間には一対一の対照的な写像関係が成立しているのだが、自然言語が示す論理的表現では、その一対一の対応の関係は成立しないし、それらの対応関係はまた任意に移行する。この言語現象についてはすでに構造言語学が言語の通時的变化や共時的構造とその変換について言及している。そこで、「signifiant 意味するもの」に関する「signifié 意味されるもの」の写像関係が移行する理由、つまり一つの記号に指示されたもの・意味が移行する、ゲショタルトのゆらぎ構造の理由が問題になった。

我々は自然言語のもつ精神活動的な性質について理解することで、この問題を解決しようと試み、ソシュール構造主義言語学やフロイト精神分析学の公理系の中から、ランガージュの構造モデルをつくり出した。はじめ、ランガージュの構造を、言語活動の実存的形態と仮定して、Existence モデルと呼んでいた<sup>3</sup>。また、その構造は話す主体の言語活動の構造であると考え、それらをParoleの構造と考えた<sup>4</sup>。現在では、Langage の構造と呼ぶことが、正しくソシュールの定義した概念と一致していると理解している。Langage ランガージュは言語精神活動であり、言語活動の基盤は精神活動によって導き出されたものである。

フロイトによると、Butつまり精神活動の目的・精神活動形態は、Objet 対象と Source 精神的エネルギー出所とPoussée 精神エネルギーの方向性の三つの要素がら成り立っている<sup>5</sup>。ことばを発する行為は、仮にそれが客観的な表現方法であっても、その表現をする主体にとって表現しようとする活動の中で、はじめて「表現するもの」が発現するのである。「表現するもの」はことばの記号として対象化でき、「表現されるもの」は主体の表現しようとする目的、欲望や欲動のパターンの差異として対象化される。表現したい欲望の対象、表現しようとする主体、表現される形式、表現するもの記号との関係の中で、表現が可能になる。自然言語を分析する場合は、ここで言う表現しようとする欲望・精神活動のあり方から論理的表現に至るまでが問題にされなければならない。

記号として表現するものこそ、ここで問題にしている表現方法と呼ばれる用法を示す。それと関係するものとして、精神活動はそれ自体がやはり言語的な構造をもつと考えられる。それらは、メタ言語的な構造であると考えられる。そこで、我々は、メタ言語的構造と論理学的な構造の相似的な関係を考えた。それがこの論文で示す言語精神活動の構造なのである。この論文では、この構造に関して議論をするのだが、メタ言語的構造を構成する5つの要素を仮定した。

## 0 - 5、科学技術人間社会学と言語学の関係

フランス語表現に関する共同研究を計画した当初から我々は科学技術文明に関する人間社会学的研究に関心を持っていた。共通する科学技術文明に関する人間社会学的研究を進めるために、言語学研究を通じて、科学技術人間社会学の基礎理論を構想するために共同研究を進めることを決めた。フランス語表現と限定したのは、我々が、言語学上の議論をフランス語で行っていること、すでにフランス語表現に関する資料があることが大きな要素となつて

いた。実際に日本語の表現方法についても分類資料を作った。しかし研究の成果として発表したものはフランス語表現方法に関する分析のみである。

近代合理主義の形成以来、科学的説明や数学的説明がそれ自体実在する法則として独自に存在している主張してきた科学主義に対して、科学することは歴史的で文化的人間の行為であり、科学的説明や数学的説明は、歴史・文化的な存在としての人間的解釈のあり方であると考えた。客観的と呼ばれる科学理論のイデオロギー性や歴史性文化性に関する議論も1970年代には盛んに行われていた。科学的観察行為に含まれる理論負荷性の認識は、科学をする行為が文化性や時代性を持つこと、科学と社会の関係を文明的に理解することで、時代的文明的パラダイム、共同主観、社会的観念形態、集団表象の体系が科学的公理系を決定する要素としてあるという解釈はすでに70年代には確立していた。科学的解釈が文明的に有効であると限定することで、近代的理性のもつ実践性、科学的思惟のもつ技術性を擁護した。

この科学性に関する認識の延長に、80年代からはじめたフランスでの研究として、科学哲学の分析方法に精神分析の公理を援用した。科学性や科学的思惟が人類的文明構造を決定している精神構造に由来すること、精神経済則から導き出された現実則が理性的思惟の起原であるというこの考え方は、科学認識論の発展の学説史的な流れに即したい。

この展開の延長線上に、科学哲学の課題としての言語学研究が提起される。つまり、合理的表現、論理的表現や因果関係に基づいた言及・科学的述説のあり方の精神構造を自然言語系の中で理解することが、科学哲学の中でことばについて関心がもたらされた理由である。科学的言語表現方法とよばれる言語用法を用いて、事象と事象の因果性や事象の計量的性質を説明するのだが、そればかりでなく、自然科学の中で確立した自然言語以外のことばとして、数学や化学記号を用いた表現がある。数学や化学記号の関係に対して、体系的な公理性を確立することや、それらの公理系の中での矛盾を排除する作業の中で、科学性と科学的理論、つまり、科学的解釈は、より説明可能性を広げた一般的な形式を身につけてきた。自然言語性をできる限り排除することで、近代合理主義精神の形成の精神である明晰で判明な思惟、その表現方法を選ぶのである。しかし、それらが示す事象の中の構造的な関係や、科学的概念や科学的理念とよばれることばによって定義され、説明される。科学的思惟も最後にたどりつく「ことば」を消し去ることはできない。このように最も洗練された科学的表現も、その基本は人間が文化的に作り出したことばに依拠し、それで科学的とか合理的とかいう概念が定義される。

科学的思惟の分析課題の中で言語問題を扱うことは、科学を文明的パラダイムの中で分析する文化人類学的視点に立った科学観の中から当然提起される課題である。科学技術の文化人類学的分析方法を我々は精神分析学的解釈に根拠を置いた。そして、科学技術が人間の行為であると考える科学技術人間社会学は、人間的とよばれる代表要素である「ことば」と無関係に語ることはできない。現在の科学技術の人間社会学的解釈に、文化的な存在と自我的な存在の相補的形態としての言語学的な分析がさらに必要とされることに気づいた。

## 0-6、学際的研究を前提とした言語学研究

人間社会学の基礎理論としの言語学とは何か。この問い合わせの前に、今までの言語学のあり方を点検しなければならない。例えば、文化的に限定された言葉の意味や文法的構造について研究する語学、言語を社会的コミュニケーションの基本や社会現象の中から研究する社会言語学、言語を発生心理の過程の中で心理的構造の要素として研究する心理言語学、言語を文化的記号として研究する構造主義言語学、言語を認知機能の要素と考え研究する認知言語学、言語を脳神経生理現象として研究する脳神経生理言語学、等々、言語に関する研究の視点はおおよそ、人間とは何かを研究する視点と同じくらい多様に存在する。そこで、言語の一部の性質を持ち出して、言語とは何かと語るのは、人間の生理的側面から、もしくは、社会的側面から、人間とは何かを語るのに等しい。しかし、言語を全体的に理解するために、すべての研究の視点に立ち、それらの研究成果のすべてを前提にして展開することが求められているのだが、この事を可能とする科学的方法も学問もない。

ことばを全体的に理解するための研究方法はない。色々な言葉に関する研究の知識を寄せ集めるのではなく、これらの課題が示す「ことば」という人間的行為つまり社会文化の産物の定義の間にある相補的な関係を見つけださなければならない。その方法を学際的研究とよぶ。例えば、ラグをコミュニケーションを可能にする記号として、

ランガージュを精神活動要素のプログラムとして理解するように、精神活動から解釈される言語理論の公理系と社会言語学や情報科学から解釈される言語理論の公理系の中で重なる二つの概念の定義から、それぞれの公理系の架け渡しに必要な理論が見つけだされる。

この論文では、言語精神活動から象徴的意味の形成の過程への移行現象を説明するために、言語精神活動のもつ構造に関する議論を深め、さらにランガージュの構造からラシングの構造のモデルを言語(情報)系の全体的なシステムの中で位置づけることを課題にして取り組まれたものである。さらにその後、具体的な言学研究の中でランガージュの構造とラシングの構造のモデルを考察する中で、精神言語活動から象徴的意味の場のモデルが課題になった<sup>6</sup>。その象徴的意味の場を通りながら文化的記号としての言語が課題になってくる。

精神活動の表現の記号や感情の言語表現の分析の中から展開したのだが、この研究は、ことばを精神活動、文化的記号活動、社会的コミュニケーション活動として位置づけ、それらの関係を説明する目的を持っている。つまり、「文化的構造」としてのラシングと「言語精神活動」としのランガージュの構造に関して示すために、ランガージュの構造分析を試みたものである。この研究も、フランス語学、歴史言語学、構造主義言語学、フロイト精神分析学のそれぞれの公理を学際的に検討する研究の中で試みられたものである。

#### 0-7、言語学モデルの検証のための言学研究の経過

フランス語表現方法の研究は、原則的にフランス語の語学研究を前提にして成立している。科学哲学やシステム論に対する学際的関心があったとしても、フランス語表現に関する具体的な研究は、語学研究の領域に留まらなければならない。

また、歴史言語学、構造主義言語学、フロイト精神分析学の公理もフランス語学の公理との重なり合いを前提にして活用されたものである。我々は、ここで示すランガージュの構造分析を、フランス語の表現方法の分析から導きだされたという前提を忘れてはいない。この、前提が、さらに一般言語学的モデルに展開するためには、フランス語以外の他の言語に於いて、このモデルが実証された時に可能になると信じる。

1997年に対立の表現を単純な対立表現と譲歩の二つ要素に分類し、それぞれの表現を分類・分析・解釈した論文<sup>7</sup>を発表、1998年には言語分析のモデルの要素全体の説明を例文を入れながら紹介し<sup>8</sup>、1999年には原因<sup>9</sup>や目的<sup>10</sup>についての表現の分析を発表し、今回も意図の表現に関する分析と解釈の論文<sup>11</sup>を発表している。

また、これらの研究を進める中で、問題になった言語統計に関する研究、特に口語的表現と文語的表現に関する調査をコーパスを使ったため、そのデータの統計処理に関する方法についても研究した<sup>12</sup>。

1997年12月から2000年12月までの4年間に我々は17の研究論文と研究要旨を発表してきた。もちろん、この研究活動は不十分なものであり、これからもフランス語表現方法の語学的調査や分析を通して、言語構造の中に存在するシステムを解明して行かなければならないと思う。

この論文はすでに1998年6月に完成したものである。この論文を同年の金蘭短期大学の紀要に投稿したのであったが、リジェクトされる結果となった。そのため、今回、再度、序文と第4章を付け加えて投稿し、紀要記載が受諾されたこともここに記しておきたいと思う。

### 1、表現方法の言語学モデルとその問題点

#### 1-1、フランス語表現方法の語学モデル

語学としてのフランス語表現に関する研究は、ソシュール言語学の定義によれば、ラシングについての言語学であると考えられる<sup>13</sup>。これを一般に日本ではフランス語学と呼んでいる。従って、ここで言うフランス語表現に関する研究はフランス語学の一分野として位置づけられるのが一般的である。

表現方法の要素の分類を進める中で、フランス語の表現は大別して三つの要素からなる事に気付いた。その一つ目が表現を構成している論理的構造で、さらに二つ目が話し手の立場から生じる表現方法、そして三つ目が幾つかの文のなかである決まった句を用いたり、また文脈の論理的関係から生じる表現である。それらの三つの要素の組み合わせから、全てのことばはでき上がり、多様な表現を可能にしている。

これらのフランス語表現に関する構造的な分類は今までにも文法的な課題や慣用的表現についての説明などでも述べられてきたので、さほど目新しい考え方ではない。特に、表現を構成している論理的表現に関してはフランス語構文の例の説明としていくらかの著書の中で紹介されている<sup>14</sup>。しかしながら、全体的にその分類について述べた研究はそれほど多くない。そこで、これらの三つの分類についてことさら取り立てて述べる必要はないものの、全体的な分類は必要であり価値ある研究と思われる所以、その分類や分析に関して更に誌面を変えて同時に示すことにした。その中で我々がこれまで分類した表現方法のカテゴリーを簡単に紹介する。

### 1-2、Modalités、話し手の立場による表現方法・法性

Modalitésとは話し手の主観的な意図やその立場を示す仕方で、文法的手段によって表現される話し手の心理的態度立場による表現方法である。この表現方法を法性と呼ぶ。この Modalités、法性はさらに四つの表現方法に分類される。

第一番目は、(B3)に示すように Point de vue allocutif と呼ばれるもので、命令や指示などを示す表現を意味し、話し手の主語が話し手の相手に指示したり、命令したり、助言したりするために用いる表現方法である。この Point de vue allocutif による表現方法を、ここでは「指示的法性による表現方法」と呼ぶことにした。

第二番目は、(B2)に示すように Point de vue élocutif と呼ばれる表現方法で、話し手の主観的な考え方を述べたり、話し手の希望や願望として語られる表現方法である。この表現方法は、(B3)のように決して相手に指示したり命令したりするのではなく。そこに「指示的な表現方法」との違いがある。この(B2)に示す Point de vue élocutif と呼ばれる表現方法をここでは「主観的な表現方法」として考えることが出来る。

第三番目は、話し手がその主観的意図を表現するのではなく、客観的な状況に照らして表現するものを示している。ここでは(B1)に示すように Point de vue délocutif と呼ばれるものである。この表現方法を「客観的な表現方法」と解釈することができる。

最後に、Degré de certitude と呼ばれる確信や確からしさの程度を示す表現方法を(B4)に示す。これは、話し手の想像の世界と比較して断定出来る世界についての表現方法である。この表現方法は「確信的な表現方法」と解釈することができる。

以上の四つの話し手の態度によって決定される表現の形式を表1に示す。

表1 Modalités の構成

Modalités		話し手の立場による表現方法
B 1	Point de vue délocutif	客観的な表現方法
B 2	Point de vue élocutif	主観的な表現方法
B 3	Point de vue allocutif	指示的な表現方法
B 4	Degré de certitude	確信的な表現方法

### 1-3、Relations Logiques の論理的関係に基づく表現方法

論理的関係から導かれる表現方法は一般的に構文の表現を構築している基本となっている。今まで、表現方法について語られたものは、この論理的関係から導かれる表現方法を意味する。それらの構造は極めて明確な表現の手段、つまり決まった言い回しとか句によって構成されている。そしてそれらの言い回しが論理的な意味を持つことになる。我々は、論理的な意味に即して、それらの表現の手段である言い回しを分類した。そして、以下の表2で示すように15の形式に分類した。

むろんこれらの分類は、例えれば対立の論理的表現が単純対立表現と譲歩の二つに構成されるように、我々独自の考え方に基づくもので、今までの分類の仕方とは異なる場合があると思われる。それらの問題についてはここでは詳しく触れない。

また、これらの論理的表現方法はそれぞれお互いに組合わされて、ひとつの文としての表現を作るので、ここで示される論理的表現は言語表現を作りだしている基本的な要素である。また、これらの論理的表現方法の分類に関

して、対立に関する表現方法についての論文で展開しているように<sup>15</sup>、具体的な分析を今後進めていく必要がある。

表2 Relations Logiques の構成

Relations Logiques		論理的関係に基づく表現
C 1	Relations de négation	否定の表現
C 2	Relations de causalité	原因結果の表現形態
C 3	Relations d'ensemble	集合の表現形態
C 4	Relations d'opposition	対立の表現形態
C 5	Relations de comparaison	比較の表現形態
C 6	Relations d'intention	意向の表現形態
C 7	Relations imaginaires	想像の表現形態
C 8	Relations instrumentales	手段の表現形態
C 9	Relations de changement	変化の表現形態
C 10	Relations quantitatives indénombrables	計量不可能な量の表現形態
C 11	Relations temporelles	時間的表現形態
C 12	Relations spatiales	空間的表現形態
C 13	Relations quantitatives dénombrables	測定可能な量の表現形態
C 14	Relations qualitatives	質的表現形態
C 15	Relations existentielles	実現性を示す表現形態

#### 1 - 4、Discours Explicatif・説述的表現形態による表現方法

ことばの表現は、一つの文としてだけでなく、複数の文の構成やその流れによって成立している。つまり、前後の文脈の中や話しの中で、幾つかの決まり文句や慣用的な句を用いることによって文脈から生み出す表現がある。もちろんそれらは前記の論理的表現方法との関係を持っているのだが、複数の文によって決定される表現の仕方であるので、ここではこの表現の仕方をDiscours Explicatif、つまり文の流れや複数の句による表現の仕方で、説述的表現形態による表現方法と呼ぶことにする。

また、ことばは話し手から発せられる説述の状態によって表現されるので、すでに述べた論理的表現の構造の集合形態によって表現が導かれて、さらに話すことばや書きことばに関する使用領域間の違いを越えて、それらの表現方法は記述的、叙述的、説明的表現と呼ばれるある事実の説明、行為の時間的記述や世界の存在に関する認識に関する表現の仕方に分類することができる。

ここで、説述的な文の流れや複数の句による表現方法を、以下の三つに分類できる。第一点目は、例えば、d'abord.... en suite.... finalement と言う表現のように複数の決まり文句や慣用句を差し込むことで文の流れから表現を作り出す方法である。下の表3の(D1)に示すように、それを複数の句で構成される表現方法と呼ぶ。第二点目は、(D2)に示した論法的な表現の流れから生み出される表現の方法と呼ばれるもので、ことばの構造的な流れによって作り出される表現である。第三点目は、一般に科学的表現で使われるのである表現の仕方で、断定的な表現や定義などを下す表現方法と呼ばれるもので、断定的な表現(D3)と呼ぶ。

表3 Discours Explicatif の構成

Discours Explicatif		説述的表現形態による表現方法
D 1	La Structure du discours	複数の句で構成される表現方法
D 2	L'Argumentation	論法的な表現の流れから生み出される方法
D 3	La Définition	断定的表現方法

### 1-5、フランス語表現方法の語学モデルの構造

以上のフランス語の表現方法を構成する要素は、それぞれが組合わされることによって一つの文やことばとしての表現を形成すると考えられる。したがって、その構造は以下に示す、三つの要素の組み合わせモデルとして示すことができる。

また、それらが文を構成する場合には必ずそれらの要素の配列の順番を持っている。文構成の順番は、先ず Modalités が文の先頭に位置し、その後に Relations Logiques が文の骨格を作る様にしてその後に続く文を完成する。これらの二つの要素の組み合わせによって構成された複合体によって、つまり幾つかの Modalités + Relations Logiques をもつ文体が複数の慣用句によって構成される文脈によって、Discours Explicatif が作りだされる。

全てのフランス語の表現は、この三つの表現方法の組み合わせによって成り立ち、その要素のフローチャートによって構成されている。従って、ここでその構造過程を、以下にモデルとして示すことができる。このモデルはフランス語の表現にかんするラングのモデルと考えることができる。をここではそのモデルを「ラングの通時的継続モデル」と呼ぶことにする。

図1 ラングの通時的継続モデル

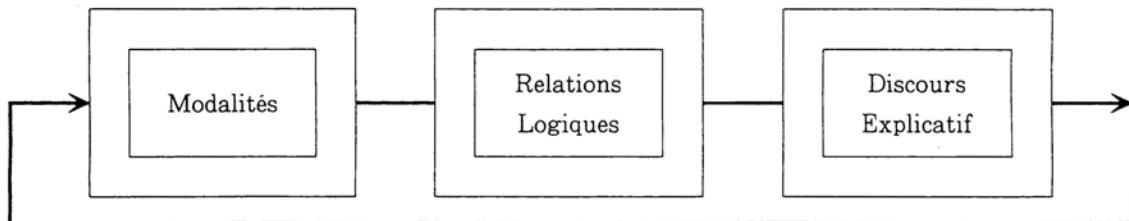


図1で示すように、表現される全ての文が表現形態の三つの基礎的な要素、つまり Modalités、Relations Logiques と Discours Explicatif、を通過しながら確立する。従って、ことば化することとはその過程の繰り返しだあると考えられる。

一つの文の後に他のもう一つの文が来て、さらにもう一つの文が続くことによってことばは生まれる。それはことばの通時的な継続過程を意味し、ことばの自然な姿である。人はそれによって自己の内的世界を確立し、つまり自己認識や意思を可能にしたり、また外的世界の認識を確立し、つまりコミュニケーションや対象認識を可能にしたりしている。

図1のラングの通時的継続のモデルの矢印は、ラング化の過程が通時的に繰り返すものであることを示すために用いた。それは通時的時間の流れに添った言語過程の継続を意味するものである。

### 2、言語活動の構造モデルの仮定

#### 2-1、語学的モデルの限界

以上述べてきた表現方法の分類に関するモデルやラングの通時的継続モデルで、フランス語の表現について語ろうとすると、次に挙げる二つの問題にぶつかる。

第一点目は、表現の形式は、テキスト全体の文章の流れとかスタイルと呼ばれる、一つの文を取り巻く文の環境によって決定されているという事実である。例えば、論理的な関係では全く矛盾することのない文の流れを作りだしても、それが自然言語的に正しい表現を約束してくれるとは限らない。例えば文語的な表現を取る文の後に口語的表現を取る文を持ってくるとするなら、いくら文の内容上論理的に正しい文体であっても日常的には聞きなれないおかしな表現となってしまうだろう。

つまり、ことばの表現は、単にことばを論理的な伝達する道具としての機能のみでなく、話し手や書き手の主觀

的な意図や立場を微妙に表現する機能も存在している。それがことばのニュアンスを生みだす。それを含めてことばは話し手や書き手の心や精神状態を表現してしまう。言い換えると、表現の在り方は単に一つ一つの文の文法的決まりや論理的規則によって決定されていない。話し手や書き手の主観的意図が、単に Modalité のレベルだけではなく、表現の在り方の通時的に蓄積したニュアンスによっても、伝えられる。ひとつのことばは他のことばの表現の環境を作りだし、またそれが他のことばを呼び起し、そしてそこに更に次の表現の環境が生みだされ、それがまた別のことばを必要とする。こうした表現の連続が、慣用的な句や決まり文句のような単語などを伴いながら、自然なとか耳慣れたとか言う表現のスタイルを作りだす。既に文の流れや複数の句による表現の仕方、Discours Explicatif・説述的表現形態による表現方法に関する説明でも述べたように、自然言語の中では、文の流れと呼ばれる文の環境によって表現が決定されることに気づく。

ここで問題となるのは、表現の連続のなかで、自然なとか耳慣れたとかいう表現の形態を作り出す機能や構造とは何かと言うことであり、逆に言うと論理的な文の構成のみではことばにならない理由である。このことは、ことばの表現方法を語る時、表現を単に言い回し方や論理的関係で分類することの限界を意味している。言い換えると、表現を構築しているものは、表現方法と呼ばれる論理的構造の組み合わせのみではなく、表現しようとするもの在り方が問題になっていることを意味している。

第二点目の問題は、ラングの通時継続モデルのエンジンについての課題から生じる。つまり、上で示したラングの通時的継続モデルでは表現形態を構成する要素が順番に繰り返すことになっている。それは精神的・生理的エネルギーがこのモデルの土台にあり、循環運動を生みだしている。それらは文化的規則であるラングの要素を引き出し、それを配列する。そしてコミュニケーション可能な構造にする。これらの配列や構造化はある規則性を持っている。

コミュニケーションの過程や環境によって表現が選ばれかつ決定されているという事実から、表現方法がコミュニケーションという言語形態と不可分な関係にあることが理解される。一つの文は、その後にまた文を引き出すものであるため、自己認識活動と呼ばれる内的な会話のやり取りにしろ、コミュニケーションと呼ばれる他者との会話にしろ、基本には文の繰り返しが、ことばの構造を作りだしている。

現実の自然言語のなかでは、話し手が用いようとしている表現が、その表現の連続的な話す行為の中で作りだされるという事実がある。この事は既にヴッドゲンシュタインが言語ゲームについて述べたものであるが、この連続した言語の連鎖ゲームの中から、つまり連續し語る行為の最中でしか話す主体は自己認知できないという現象に気づく。それはまさに話す行為を続ける主体の在り方、欲望の姿を意味しないだろうか。日常的に使われている言語表現は、表現行為と呼ばれる語る主体の在り方がその表現方法という形式の中に不可分に結合し、主体とよばれる表現の連鎖を作りだしていることを気づかせてくれる。つまり、Modalités、Relations Logiques と Discours Explicatif、の流れの反復過程によって言語表現が確立すると考えたラングの通時的継続モデルからは、ここで問題になった話す行為の、つまりその反復行為のエンジン・原動機については述べられてはいない。

以上二点にわたって述べたように、語学的な構造の説明のみから、つまり文化的な規則の構造の解明からだけでは、語り続ける主体の問題、ラングの通時的継続モデルは説明できない。ラングの通時的継続構造が確立するためには、語る主体や聞く主体がもう一方で問題になる。これまで述べてきたラングの構造モデルから、コミュニケーションの自己組織系の道具としてある言語表現の在り方を語ることは既に限界を来たしていることに気づく。つまり言語活動主体の問題は、ラングの分析からのみでは解決できないので、ソシュールの定義するランガージュについて問題を立ててみた。言語表現過程では、次の表現を持ちだす主体の意図や欲望がその土台にある。ソシュールは、パロールを言語活動を音声や空気の振動を生み出す生理的実行という面からだけでなく、表現を構成する構造つまり表現する欲望の精神的実行という側面からも考えた。つまり、語ろうとする主体を問題にするためにはソシュール言語学が定義する言語活動であるパロールやランガージュについて理解する必要がある。

もちろん、言語活動・ランガージュは単に話す側の構造だけでなく聞く側の構造もある。コミュニケーションは異なる人格が互いにことばの通時的で連続的なやり取りを続ける行為から成立している。コミュニケーションの中では、他者からのメッセージを聞いている自分とそれに反応しているつまり話す自分が同時に存在している。話すことによって他者のことばは理解される。この自己刺激を通じて、話そうとする欲望は刺激され、聞き手は話そう

とする主体に変貌する。コミュニケーションによって自己認識活動は刺激される。

ラング・ランガージュの活動は、自己の観念形態の自己組織的増殖活動を土台にして、対象認識過程を作り出している。例えば、他者に対して語る時、それを自らも同時に聞き、そして話す主体の意識、つまり自己意識を作りだすことによって、話そうとする対象の意識を生みだしている。対象認識は自己認識と同様に話しを続ける行為の中で増殖する。また逆に自己認識も対象認識活動を通じて導かれている。つまり、自己意識とはある他者や対象からの意識である。

このように語学的モデルだけでは説明がつかない。言語活動や言語構造を理解するためには言語活動としての精神機能の解明とそのモデルが必要とされる。

## 2-2、ラング・文化的規範の必要性

コミュニケーションはことばと言う交換可能な音の生産物・意味するものをお互いに作り、それをやり取りする作業である。他者と交換不可能な音の生産物・意味しないもの・雑音はコミュニケーションの道具としては使えない。

ことばも遺伝子と同じようにその増殖過程でコピーの誤りや、勝手に意味するものや意味されるもの結合を作りだす。これを言語の通時的な構造の変化やゲシュタルトのゆるぎと呼ぶ。この自然発生的な構造変化を野放しにしていては、コミュニケーションは不可能となる。その変形されたもの修正するために、交換可能な生産物の基準を登録するか、再登録する必要がある。つまり、他者とのコミュニケーションに対して「意味しないもの」を「意味するもの」に修正するためには、文化的規範と呼ばれるマニュアルに従って、壊れた音やつけ間違った音を正しい音に取り換えるなければならない。

異物を排除する免疫機能が存在しなければ、生体は生命を自己保存することができないように、自然発生する「意味しないもの」を排除する機能が必要である。それは本来その原因となったナルシシズム的な自我の内部に構築することはできない。その為、外にその機能を作りだす必要が生じた。それが文化的規範と呼ばれる社会身体の中にある免疫機能である。

この社会身体の規範の代表的なものとしてラングがある。ラングは自我の言語活動・ランガージュ活動の中で勝手に増殖していく通時的言語構造に変化を厳しくチェックし、意味されるものと意味するものの関係を正す。文化的生産物であるラングを際限なく自我内部に登録しつづけることで、文化的規範は自我に登録され、ナルシシズム的な機能で作用するエスの活動に対して抑制力を働かせる事ができる。自我は、そのため現実則と呼ばれる、最も少ない精神エネルギーで他者とのコミュニケーションを可能にする方法を身に付けるのである。

コミュニケーションを通じて、自己は他者に対する自己として確立するのである。このことばのやり取りには規則が加わる。つまり自分だけではことばのキャッチボールはできないのである。生きるために人は交換可能な生産物を作らなければならない。ラングの通時的継続運動、ことばというボールのやり取りを維持するためにはラングの文化的産物とその厳格な文法や意味として規定された規則が必要である。

## 2-3、ラングと言語活動・ランガージュの繰り返しモデル・語る行為

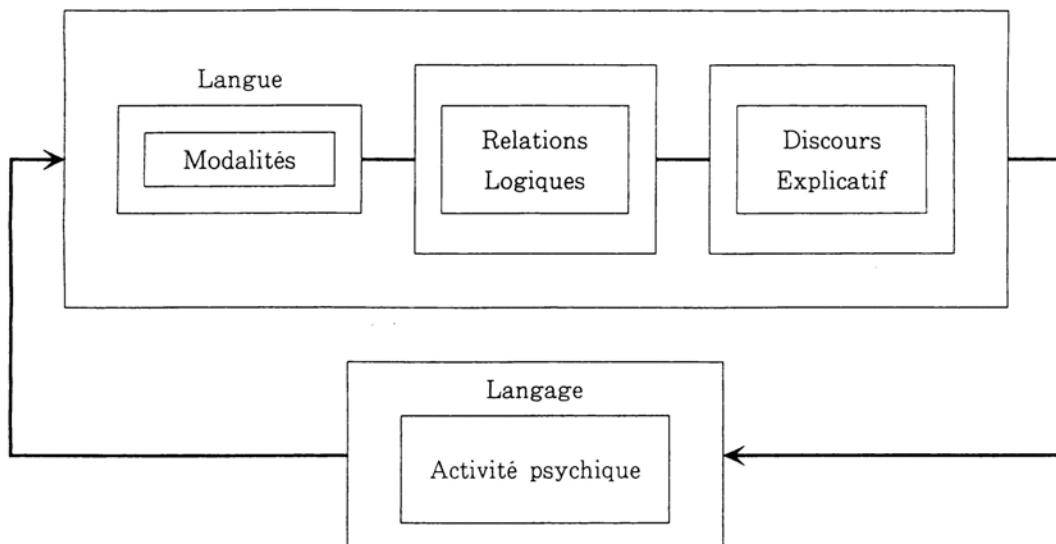
前節で展開した語る行為のモデルを考えるなかで、コミュニケーションの手段としての言語の規則性を語るためにラングの構造モデルを考えた。さらに表現方法に関する語学的な課題を展開するために、言語活動・ランガージュの構造モデルを立てることが必要となる。しかしながら、この言語活動・ランガージュの構造モデルは、決してラングの構造モデルと切り離して語ることはできない。今まで議論してきたラング化の過程のモデルの中に言語活動・ランガージュの存在を入れる必要がある。つまり語る主体にとって、ラングと言語活動・ランガージュは相補的な関係としてある。

従って、言語活動・ランガージュの構造モデルを考えるとき、言語化とは表現しようとする主体がその表現しようとする欲望を、表現する手段つまり句や単語とか文法と言う道具を使って実現する過程を意味するので、表現方法に関するモデルは表現方法の言語的規則によって成り立つ共時的な構造と、表現しようとする主体の通時的な精神構造の二つのモデルの組み合わせによってでき上がっている、という概念が前提となっている。そのモデルをラ

ングと言語活動・ランガージュの繰り返しのモデルにして図2に示す。

言語形成過程で繰り返し発生する精神構造を我々ははじめ実存モデル、Existence、と呼んだ<sup>19</sup>。何故なら、語る主体は決して対象化しえないし、そこから語る行為が始まる。語る行為は生きている活動そのものである。そのことを敢て語るなら、言語過程は文化的存在しての自我と自我の認識世界としてある文化的存在の相補的現象として登場していると理解するしかない。それは、サルトルの言う内的世界の外化と外的世界の内化の運動による結果<sup>20</sup>として考えられるものである。これが語る主体について理解されなければならないことである。この語る主体を言語過程の基本に置き、我々は実存 Existence と呼んだのであった。しかし、この Existence の概念・語る主体の概念は、ソシュール言語学で定義されている言語活動・ランガージュと同一のものであると理解し<sup>21</sup>、ここではラングと言語活動・ランガージュの繰り返しのモデルと呼ぶことにした。

図2 ラングと言語活動・ランガージュの繰り返しのモデル



#### 2-4、言語活動・ランガージュを構成する要素について

言語活動・ランガージュの構造を構成する要素は五つあると考えられる<sup>22</sup>。

第一の要素は表現しようとする欲望の質を肯定と否定との二つの局面で考え、それをここでは Polarité・極性と呼ぶことにする。これはフロイトが定義した pousse(慾動の心迫)の概念と共通している。正の方向の心迫はエスからのエロチズムを生み出し、負の方向の心迫は超自我からの抑圧を生み出す。無意識の精神活動が二つの方向性を持つように、言語活動の深層にある表現しようとする欲望は肯定と否定の極性をもつと考える。

第二の要素は、質 Qualité と名づけた自己と非自己の区分からはじまり、表現する主体と表現される対象の質的差異を決定する要素である。

第三番目は自己の内部とそれ以外を区別することによって生みだされる「ここ」と「ここでない」という空間 Espace の要素である。

第四の要素は時間 Temps の要素である。これは快感原則的に満たされる欲望が「今即座」の状態であるのに対して、現実則で機能する自我は、言語習得によって欲望の対象を充たそうとするため、まず文化的規則の習得をしなければならない。その習得を通じ、その規則に従い欲望の対象を獲得しようとするため、「今即座」の状態でない在り方を見つけだす。それが時間概念の発生の起源を作りだす。つまり、一つは獲得したい欲望の対象を規則に従い獲得しようすることによって過去は生み出され、獲得したい欲望が獲得できないときそれを「今」から排除するために未来を作りだすことになる。また、欲望を満たす時間が即時的には可能にならないことによって、現実則に即して辛抱したり待ったりすることを覚える。その時に未来の時間概念が形成されると考えられる。

第五番目は量 Quantité に関する要素である。第一ナルチシズムでのみ機能していた自我にとって自我以外の世

界はないため、この状態では全知全能のナルシスト的自我のみの世界が登場する。つまりその世界では自我という「全て」と自我以外という「まったく存在しない」世界に分かれていると考えられる。つまり、ここでは自我が「全て」でそれ以外の世界はないため、存在する世界は一つである。しかし、自我と対象の世界が生み出され二つの世界が登場する。この一つから二つの世界の登場という質的变化を通じて、量的概念が生み出される。つまり、対象世界は質的に異なると理解すると同時に異なる数だけの対象として自我の前に現れる。その分離の過程で量的概念が生み出され、その概念が具体的な対象から独立したとき数の概念が形成される。

## 2-5、言語活動・ランガージュの構造のモデル

以上の五つの要素が組み合わされて、言語活動・ランガージュを構成するモデルが作られると考える。それらの要素は、今ここでは平行して並べられたが、それらは同時に自我機能の発生的過程の中で生じる精神エネルギーの作用要素と精神構造の機能要素の分離発生過程を意味する。従ってここで言う極性 Polarité は快・不快や否定・肯定と言う精神作用要素を表現するものであるので、自我の構造化を推し進める起動力であり、精神エネルギーのベクトルを意味する作用的要素として解釈できる。また、質 Qualité、空間 Espace、時間 Temps や量 Quantité は精神構造の在り方を示す機能的要素として考えられ、自我の構造の基礎を構築する。この言語活動・ランガージュの構造のモデルを次の図に示した。

図3 言語活動・ランガージュの構造モデル

Polarité	Qualité	Espace	Temps	Quantité
positif	moi	ici	maintenant	nulle
négatif	non-moi	non-ici	non-maintenant	tout

これらの要素の組み合わせによって話す行為の欲動活動が確立する過程、つまり言語活動・ランガージュの発生的過程があると考えられる。その過程を解明するために、さらに言語過程に関する認識論的な研究課題に取り組む必要がある。

## 2-6、ラングとランガージュの回帰的運動

我々はラングの分析を通じ、つまりフランス語の表現方法の分類という語学的課題から、その根底にある言語活動・ランガージュの構造についての仮定を立てる試みを行った。それら二つのモデル、つまり、表現方法を巡るラングのモデルと言語活動・ランガージュのモデルの関係は、生きた人間のコミュニケーションや会話の中で通時的に展開されるものである。つまり、この二つのモデルが実際は、相互依存し、相互に支え合う言語のモデルであると考えられる。

また、ここでは言語活動・ランガージュからラングに移行する時間  $t_1$  はラングから言語活動・ランガージュに移行する時間  $t_2$  と異なる。そこでこの繰り返しは通時的な時間の経過を意味する。思惟過程の言語活動にしろ、他者とのコミュニケーションにしろ、この通時的時間の中で繰り広げられるやり取りであることが理解できる。

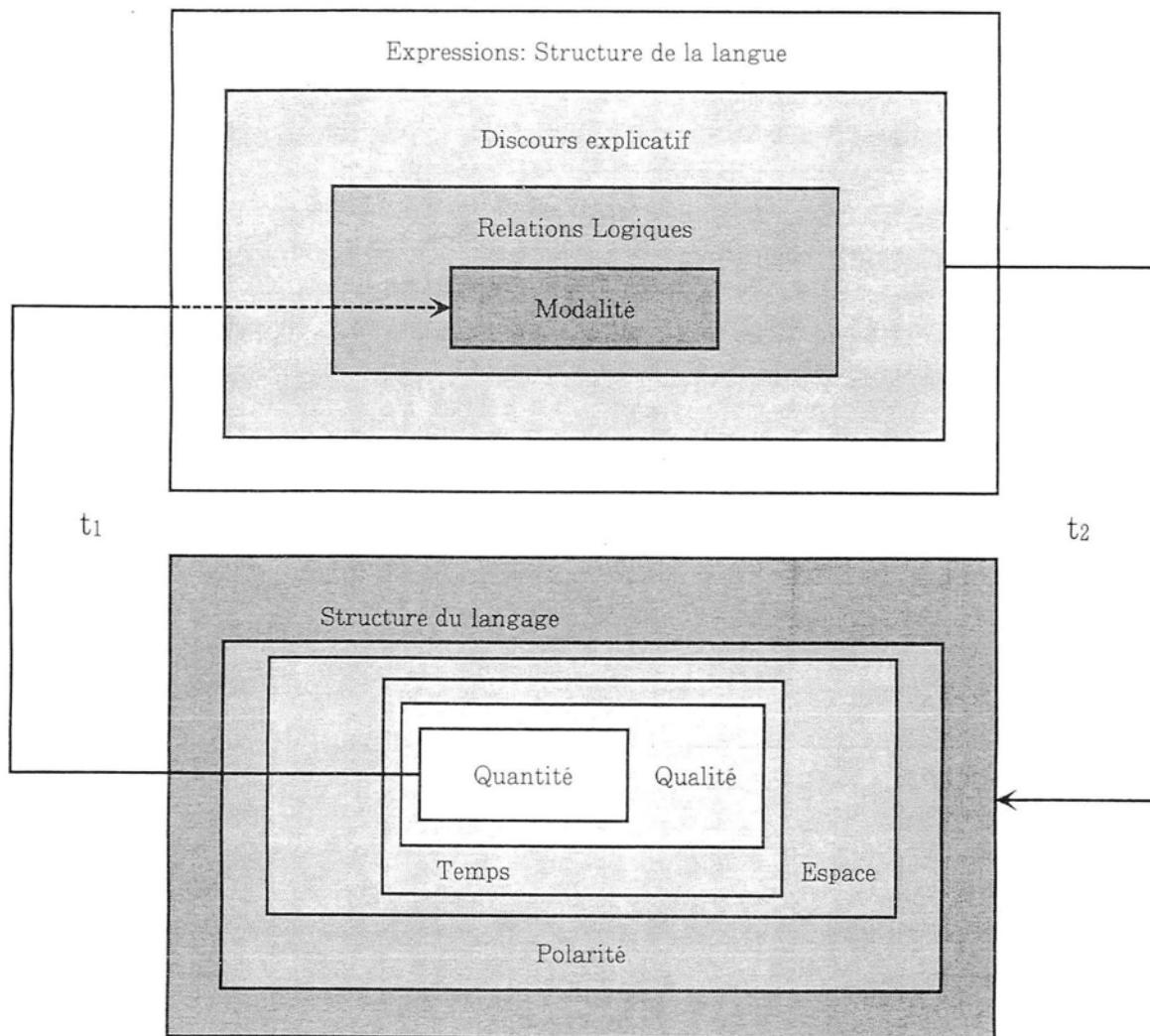
この表現する主体と表現される構造が繰り返し通時的な時間を構築しながら運動し続けていることばの世界の在り方、つまりラングのモデルと言語活動・ランガージュのモデルの相互依存的関係を、ここで我々はラングとランガージュの繰り返しのモデルと名づけることにする。このモデルはラングと言語活動・ランガージュの通時的繰り返しを生み出す回帰的運動を示すものである。

ラングのモデルも、今まで述べてきたラングの通時的継続のモデルでの議論を踏まえ、ラングの構成要素の順列組み合わせとして考える。つまり言語化過程では、先ず Modalités がはじめに位置し話し手の主観的空间を作りだし、その後に Relations Logiques が表現の内容を決定しながら続き、これらの二つの組み合わせによって構成

された複合体のことばの文脈の中に Discours Explicatif が発生し、ことば全体の中から意味するものを形成する過程を、ラングの通時的継続のモデルとして示した。

さらに、言語活動・ランガージュに関するモデルでも、言語活動・ランガージュを構成する五つの要素が順列を取りながら組合わされるものであると考え、それらの運動を表現できるモデルを提起した。その上で、この言語活動・ランガージュの構造化とラングの構造化は繰り返しそれぞれの過程を反復するものであるから、今までに述べてきたラング化と精神言語活動(ランガージュ)のモデルを組み合わせて、それぞれのモデルが相互に関係し、影響し、刺激し合い、言語活動の自己組織系を作りだしているモデルを考えた。言語活動の自己組織的運動を示すモデルとしてラングと精神言語活動(ランガージュ)の回帰的運動に関するモデルを提起する。

図4 ラングと言語活動・ランガージュの回帰的運動のモデル・自己組織系の言語活動モデル



## 2-7、ランガージュの構造の発生論的解釈とそのモデル

個体発生の過程で系統発生の歴史が繰り返すことを胎児の成長から見ることができる。人間の生体は今までの生物から人類に至るまでの進化の歴史を個体発生の度毎に確認している。生命体は種の保存を何よりも優先し、もし胎児の奇形が見つかればそれを異物として排除する。胎児期に個体は種族保存の力によって厳しく淘汰される。また、老いて死すことも種を残すための利己的遺伝子の仕業ともいえる。種の原型を保つために、環境に順応するために生存中で獲得した情報は遺伝させない。余計な情報を取得した個体は利己的遺伝子の立場からは死ななければ

ならない。種族保存の原則から種の原型の維持を優先する為に個体に死を与えなければならない。E.モランは個人の死は種の維持の為にあると語った<sup>23</sup>。

この生命体の種族保存の為の胎児期の於ける系統発生の繰り返しエネルギーをフロイトは種族保存欲動・性欲の基本形態を形作る器官的欲動(pulsion organique)と考えた<sup>24</sup>、さらにこの器官的欲動が第一過程(processus primaire)の原形を作りだすと仮定した。

また、自我の個体形成過程で人類の進化の過程で辿った心的装置(Appareil psychique)の発展段階の歴史が、エディプス・コンプレックスの存在として繰り返され、自我は第一ナルチシズムで機能する口唇期・対象不在期(stade anobjectal)から、前エディプス期の超自我の発生から始まる肛門期・半対象期(stade semi-objectal)と自我の多重構造の基本形である超自我、自我、エスの構造が確立する男根期・対象期(stade objectal)の形成過程を個体形成の中で繰り返す。この前提に立って、唯物史観を土台にして精神機能の進化や発生論的仮説を人類学や考古学的に論証し言語の形成過程を究明した研究もある<sup>25</sup>。ここではフロイトの精神分析の唯物史観的解釈が言語発生論の科学的論拠として語られている。

一般に、フロイトが自我の発生過程で活用した進化論的仮説、つまり個体発生は系統発生を繰り返すという考え方には、言語学を展開して行く上でも重要な参考となる。何故ならば、言語化の過程でも上で述べたように、ラグ化と精神言語活動・ランガージュの繰り返しが存在し、その過程で精神言語活動(ランガージュ)やラグの要素が再構成化される運動が存在すると考えられるからである。

精神言語活動(ランガージュ)の形成過程は、ランガージュの構成する5つの要素の単なる組み合わせではなく、それらの要素の構造的な配列によるものである。その構造的な配列は精神構造の発生過程から解釈できる。

まずこれらの要素が発生する以前の段階がある。胎児期から産まれたばかりの乳児の段階では、自我がまだ言語化されていない状態で、この第一段階は口唇期・対象不在期(stade anobjectal)と呼ばれ、自己と対象の二元論的世界は存在しない。そこにあるものは自我の精神運動の土台を構築するためのナルチシズム(Narcissisme primaire)と死の欲動(Pulsion de mort)と呼ばれる二つの対立する欲動運動である。死の欲動(Pulsion de mort)は、胎児期(Stade de l'embryon)に於ける保持欲動(Pulsion conservatrice)から進化したもので、種を維持するために個体を破壊する負(négatif)の欲動活動を形成する。第一ナルチシズム(Narcissisme primaire)は胎児期(Stade de l'embryon)に於ける自己保存欲動(Pulsion d'auto-conservation)から進化したもので、自我を保存する正(positif)の欲動活動を形成する<sup>26</sup>。

このように種族保存や個体保存本能とは形態の異なる、負(négatif)の欲動活動としての死の欲動(Pulsion de mort)と正(positif)の欲動活動としての第一ナルチシズム(Narcissisme primaire)によって自我は機能し始める。これらの二つの異なる精神エネルギーのベクトルを持つ欲動によって、第一段階の自我は活動し始める。この正(positif)と負(négatif)の異なる二つの欲動活動は自我機能の作用要素である。この二つ作用要素によって自我機能は活動し進化し始める。

第一段階では自我は自己と対象の分別がつかず、自己を育ててくれる母が自己である世界に住んでいるので、つまり自分の食料を自分が供給できるのであるから、自己を全能の存在だと思う。しかし、乳児は肉体的に成長するにつれて、生理的な欲求も拡大していく。それらの欲求を泣くとか笑うといった生理的反射として表現してだけでは、充分に欲求を充たす事ができなくなる。そのためそれらの欲求を伝える手段として言語を取得しなければならない。

この段階から言語活動としての自我が発生し、それはさらに言語を登録しつづける。この言語習得は生命を維持するための個体保存の行為である。生きるために他者に自己の欲求を正しく伝えなければならない。本能を失った人間に於て他の個体とのコミュニケーションはことばという文化的な産物を学ぶことによって可能になる。それは同時に文化的規範は自我が構造化される事を意味する。この言語化によって新たな第二段階の自我の形成が始まる。

ことばの習得や母とのコミュニケーションが可能になる段階を精神分析では肛門期・半対象期(stade semi-objectal)と呼んだ。この時期から文化的規範、つまり自己性欲や近親相姦のタブーが言語を通じて自我に登録される。しかし、それらのタブーを言い渡す超自我は対象化されていない。半対象的世界つまり自我が自我を容赦なく攻撃することになることを、メライン・クラインは前エディプス期の超自我による幼児の夢分析から分析した<sup>27</sup>。

この段階では負(négatif)の欲動活動と正(positif)の欲動活動はそれらの対象を持たないため、その精神エネルギーの方向は存在しない。そのため負(négatif)の欲動活動が容赦なく自我を攻撃することになるマゾシズム的行為が発生する。負(négatif)の欲動を自我以外の対象に向けなければならない。そうでないと自我は自我によって解体してしまう。そこで自我は、憎悪の対象を自我以外の世界に作り、その憎悪する負(négatif)の欲動活動が自己的内部に向かわないようにする。このとき、自分以外の世界が生み出される。憎悪の対象として外の世界は登場し、ナルチシズムの世界として内的世界は保存される。

この段階で始めて対象世界が生み出される。その最初の意味の世界・表象的差異の世界に、自己(moi)と非自己(non-moi)の質的世界とここ(ici)とここでない(non-ici)の空間世界が登場する。自我は自己を攻撃する負(négatif)の欲動活動を自己から別のものに向けるために、非自己(non-moi)を作る。そこで、自己はナルチシズムによって充たされ続けることを維持でき、超自我による攻撃を無意識化し、それを対象の表象の中に封じ込める。つまり、超自我によって自我は直接に攻撃されることはない。攻撃の対象である醜く憎悪に充ちた世界は、自己以外の世界であり、自己はいつも正しく美しい世界であり続けるのである。

負(négatif)の欲動活動を自己つまり「ここ」(ici)の場所から自己ならざるものつまり「ここでない」(non-ici)場所に移すことに成功したとき空間の概念が発生する<sup>28</sup>。同時に、自己(moi)と非自己(non-moi)の質的世界の登場は先ず自己(moi)が全てであり非自己(non-moi)が全く存在しない質的世界からゼロか一かの量に関する世界の入り口を作りだし、質概念から量的概念の形成は展開・進化する。

また、負(négatif)の欲動活動の対象を空間的に自己から切り離せないとき、つまり、それは自己に関する事である事が否定できない状態のとき、その対象が現在の自己に関する事でない、つまり今の自分に関係ないこととして、切り離す。そこに時間の概念が発生する。

つまり充たされたことがない欲望の対象を現在(maintenant)の自己から遠くに離れた(non-maintenant)に置くことによって、つまり未来を作り出すことで現在の自己のナルチシズムを維持したり、不愉快な対象を現在(maintenant)の自己から遠くに離れた(non-maintenant)に置くことによって、過去を作り出す。このような忌ま忌ましい負(négatif)の欲動活動の対象やかなえる事のできない正(positif)の欲動活動の対象を現在の自我から、悔いと呼ばれる過去や希望と呼ばれる未来に、切り離すことで、自我のナルチシズムを維持しようとする<sup>29</sup>。このようにして時間は創られる。

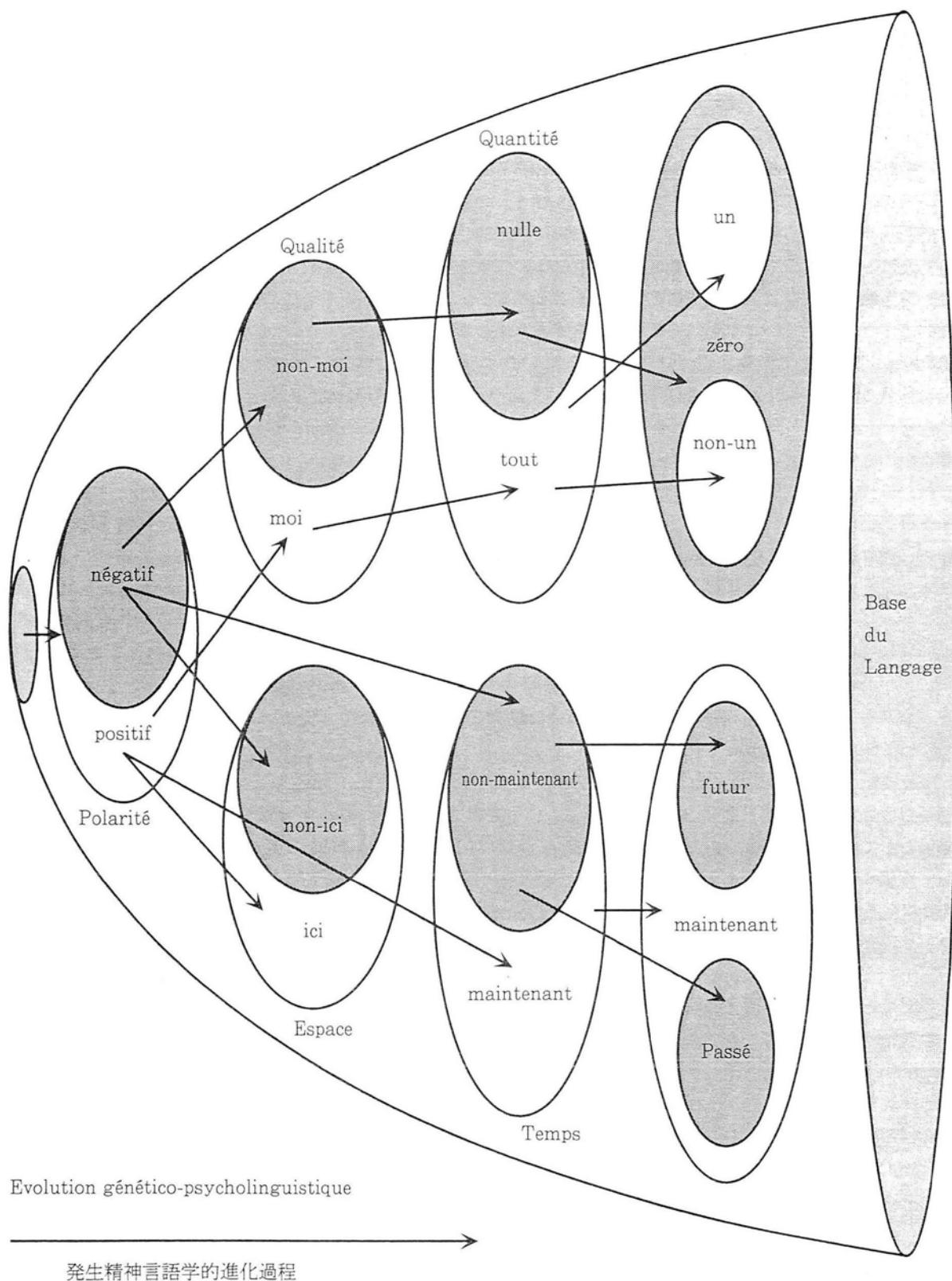
この時間概念も空間概念も対象世界の広がりという言語化の進行に伴って確立していく。これらの質、空間、量、時間は自我の機能的要素と考えられ、先に述べた作用要素である負(négatif)の欲動活動と正(positif)の欲動活動の結果として生み出されるものであると考えられる。そして、この四つの機能要素に従って、自我は言語構造を構築し、意識や無意識と呼ばれる負(négatif)の欲動活動と正(positif)の欲動活動の結果としての言語活動を生み出すことになる。

つまり、それらはことばと呼ばれる正(positif)と負(négatif)の欲動活動を土台にする精神エネルギーの産物である以上、ことばが生みだされる度毎に、個体発生の時系統発生が繰り返されるように、言語活動・ランガージュの作用要素と機能要素の進化過程を毎回繰り返すのである。

この言語活動・ランガージュの発生過程とは、精神活動の作用要素である負(négatif)の欲動活動と正(positif)の欲動活動によって自我が質、空間、量、時間の機能的要素を構築していく過程であると考えられた。この過程は、言語発生過程で繰り返し生み出され、言語活動を構築する言語活動・ランガージュとラングの回帰的運動の要素であり、言語活動の形成その後の機能的要素の進化の過程でランガージュの土台(Base du Langage)が生み出される様子を示したものである。

以上の議論を以下の言語活動・ランガージュの発生過程過程をモデルに関する解説として図5に示す。

図5 精神言語活動・ランガージュの発生過程モデル



### 3、言語活動・ランガージュの要素に関する定義

#### 3-1、極性 Polarité の発生とは何か

まず、表現しようとする主体は表現しようとする動機を持っている。それらは始めから論理的に整然と整理されているわけでもなく、また文法的に構成されているわけでもない。始めにあるものは、表現しようとする欲望である。もちろん、それらは既に言語化されている訳であるが、それらは、快感原則を基にして機能している。つまり、表現の動機は快感原則に基づく自己保存の運動によって生み出される。

これらは二つの方向を持って生じる。フロイトによると精神エネルギー、つまり慾動は身体の内部にある二つの源泉(Source)から生じる。その一つは器官的源泉とよばれ、種族保存のための生命力・精神エネルギーの基盤を作り出す源泉であり、つぎの一つは身体的源泉とよばれ、個体保存のための生命力・精神エネルギーの基盤を作り出す源泉である。例えば、ナルチシズムのように人間は種族保存のための生命力を個体保存のために使う。

この二つの精神エネルギーの源泉はどちらも、人間の場合、個体保存、言い換えると自我の保存のために費やされる。この場合、それらのプラスの慾動の心迫が引き起こす精神活動は、理想の自我の形成とよばれるナルチシズムや、性的対象への欲望である。このプラスの慾動の心迫に対してマイナスの慾動の心迫がある。例えば、早期の性的慾動を抑圧することで精神エネルギーを自我の形成に費やそうとする作用や、逆に過剰な自我への投資を抑えることで種族保存を可能にしようとする作用などがある。

このマイナスの慾動の心迫を引き起こす機能を超自我と呼んでいる。またプラスの慾動の心迫を引き起こす機能をエスと呼んでいる。精神言語活動の場合でも、同様に、表現しようとする慾動の肯定的な方向と否定的な方向があると考える。この精神言語活動の深層では、慾動の心迫のプラスの方向もマイナスの方向も、共に快感原則による快と不快の機能によって導かれる。

その過程を、ここでは負(négatif)の欲動活動と正(positif)の欲動活動と呼ばれる欲望の肯定的形態と否定的形態に分けた。そして、それらをここでは肯定、positifと否定、négatifと呼ぶことにした。この欲動活動つまり欲望の二極性を Polarité と呼ぶ。

さて、ここで言う肯定と否定は、文法で呼ばれる肯定文や否定文と直接関係ない。例えば以下の文は文法的には否定形であるが、ここで言う動機上では肯定、positifとして位置づけられている。

Je ne peux pas m'empêcher de parler de ce sujet.

私はその課題を話さずにはいられない。

課題について語りたい欲望がある。それを黙っていることができない。したがって、この表現はいかに文法的に否定文として構成されていても、ランガージュのモデルから考えるならば肯定、positifを取っていると考えられる。

さて、次の文は文法的には肯定文であるが、ランガージュのモデルからは否定、négatifとして解釈される。

Je me suis arrêté d'aller chez lui, bien que j'aurais voulu le revoir.

私は彼に会いたかったのだが、彼の所に行くことを止めた。

つまり、行きたかったが行くことを止めるという自分の欲望や願望に対して否定的に行動したのであるから、この表現は Négatif を取っていると解釈された。

もちろん、それらの表現が生み出された時には、既に Polarité の過程を経過した後の姿や形態であると考えられる。つまり、この具体的な表現以前に、もしくはメタレベルで存在している状態としてこの Polarité は考えられている。

#### 3-2、質 Qualité の発生とは何か

前エディプス期の自我は、第一ナルチシズムで機能している。つまり、幼児に於ては自己と他者との区別はできない。取りわけ、母は自己であり自己は母と同一化されている。そこで幼児にとって母の言う自分が自分であり、それは自分そのものである。つまり、自己のまったく関与できない他者もまた他者にたいして対置している自己も存在していない。

その状態から、自己と非自己とが発生する。それは自我が言語化を土台にして機能することを通じて進行する。口唇期での快感原則で機能する自我は、欲望の対象を得るために、それを他者に表現するための規則・文化的に確立している規則を守ることを必要としてではない。そこでは、快と不快を表現することで十分に欲望の対象を獲得できた。しかし、欲望の対象が十分に獲得できなくなるとすれば、それを獲得するための手段を見つけださねばならない。それは直接欲望の対象を指示する指示言語を通じて可能になる。つまり、欲望の対象を得るための手段は、他者に自分の意志や要求を伝達の手段としなければならない。それはまさしく言語である。

つまり、文化的に確立しているコミュニケーションの規則を自己の中に取り入れ、それで自我を作る必要が生じる。例えばお腹が空けば、「ママ」と言ってそれを直接与えてくれる人に理解されれば良かった。一度、ラングを手段にしてコミュニケーションを取ることを始めた自我は、文化的な規則を受け入れることになるため、第一ナルチズムの自我は抑制されることになる。この抑制によって不快が生じる。今までの全知全能の自我でありつづけた乳児の自我は始めてナルチズムに充ちた平和な世界を乱されることになった。自己と他と区別のつかない自我にとって、どうしても自己と認めがたい世界が生み出されることになる。第一ナルチズムで機能する自我の中に生じたこの不快と言う異物を取り除かなければならない。そこで、自我はその異物を非自我として自我の外に追い出そうとするのである。それが対象世界の確立と呼ばれる、自我と非自我の分裂を生み出すことになる。

この自我、moiと非自我、non-moiとの分裂の状態から、ナルチズム的な自己である世界と現実と呼ばれる自分の力の及ばない世界が生み出される。それが言語における質的世界の原形の発生として解釈される。つまり、Qualitéは自我、moiと非自我、non-moiとの発生から生じると考えられる。つまり、それは口唇期の終わりを意味する。そして、同時に快感原則でのみ機能する自我の終わりを意味する。

今まで自他の区別のつかない、言い換えると人称性の存在しない乳児期の自我は、母の存在を自己化していた。その自己化された母の立場が自己的立場であり、母に取っての自分が自分の認識の基本となる。従って幼児は母から呼ばれる自分の固有名詞が、自分を示すものとなる。固有名詞が一人称を表現する手段として用いられる。

しかし、乳児が母を対象として認知し始めることによって、原始的な一人称から前エディップ期の二人称が発生する。社会的規範の代名詞としての父の存在の認知によって、また言語活動によるコミュニケーションの確立によって、個人の社会化の過程がさらに進み、三人称が発生する。それは母と自分との関係の外に自分の関係を見つけだすことを意味する。

家庭という社会の中で、幼児は自己と家族との関係を見つけだし、家族の中のそれぞれの役割を理解し、母と父親との関係、自己と両親との関係を見つけだす。そのことを通じて一人称代名詞が自己を表現するための道具として受け入れられるようになる。固有名詞から一人称代名詞が自己を語る主語として使われるようになることで、非固有名詞化された一人称「私・僕」をもって自己を語ることになる。人称的な文法的構造はこうして発達する。

このように質的世界の発展は自己と非自己の分離からはじまり、その多様な人称性の確立を通じて発展する。

### 3-3、空間 Espace の発生とは何か

空間の形成は、肛門期に始まる。つまり、今までの如く自我は快感原則に即して機能しようとするため、不快なものを自我の外に出し、それを自我でないものとする。それは自我の外に世界を作ることを意味する。つまり、この段階で、「ここ」(ici)と「ここでない」(non-ici)の空間性が生み出される。肛門期における「ここ」とは快感原則で機能する自我の内部を意味するものである。そして「ここでない」空間は快感原則によって自我から取り除かれた部分として発生すると考えられる。

つまり、「ここでない」空間性は「ここ」である第一ナルチズムで機能する自我から切り離された「もの」である。つまり、「ここ」(ici)から「ここでない」(non-ici)空間が生み出される過程、今まで議論してきた、自我、moiと非自我、non-moiとの分裂の瞬間と同じであることが理解できる。つまり、「ここ」は自我の内部を意味し、そして「ここでない」ものは非自我を意味している。そしてこの二つの状態の発生が、異なる二つの世界の出現を意味した。つまり、二つの異なる質 Qualité の世界、つまり自我、moiと非自我、non-moiとの発生と、「ここ」(ici)から「ここでない」(non-ici)空間の発生は同時に進行するものであると考えられる。それは口唇期の終わりの自我の状態、つまり快感原則でのみ機能する自我の終わりを意味した。そして肛門期の到来によって空間は具体

的な質の世界として発展していく。

「ここ」と「ここでない」という二つの分離が空間の概念を生み出し、それがさらに現実則に従い「ここでない」場所をさらに差別化する。それが空間が広がる現象を意味するが、それも憎悪とともに広がるのである。憎悪のやり場を見つけるために、幼児は自分の外に場所を作りだす。自己のナルシズムを充たされない分だけ多様な空間が必要となる。それが地理的な他の世界の出現である。

### 3-4、時間 Temps の発生とは何か

快、不快の反応は即時的な身体的反応に近い。ここで言う快感原則で機能する自我は、不快なものを即座に排除しようとする。つまり、快感原則によって満たされる欲望の対象は「いま」以外に在りえないものである。主体が欲望の対象と分離できない状態のこの段階では、時間概念は生じない。

既に質的、空間的世界が存在し、不快なものを自己から排除できない状態の場合、不快なものをナルシズム的自己の外に排除するために、さらに時間を生み出さなければならなかった。つまり充たされることがない欲望の対象を現在(maintenant)から未来という現在でない(non-maintenant)所に置き、不愉快な対象を現在(maintenant)の過去という現在でない(non-maintenant)所に置くことによって、自我はようやくそのナルシズムの状態を維持できた。このようにして、時間は創られる。

充たされない欲望は、その対象を未来と呼ばれる所を持って行き、それが現在から繋がれた世界であると、つまり必ず現在に登場する世界としてその欲望の対象をつかみ取る機会を与える。そのことで欲望を充たされなかった悔しさは癒されるのである。この自慰行為を実現するものが未来という幻想なのである。

エディップス・コンプレックスを通じて、自我は、超自我の破壊的欲動やその容赦無い攻撃から身を守るために、理想の自我を作り、ナルシズム的精神エネルギーをその理想の自我に向けることで自我の安定をはかる。この理想の自我の出現こそ、人が未来という時間自己意識した時を意味する。行き場のない時代には、希望という幻想に向かって、遠大な未来を夢見みる理想主義や空想的社会主義とか空想的エコロジー主義が発生することは避けられない。

自我は快感原則に即して不快なものを「いま」の外に弾き出そうとするため、「いま」か「今までない」という区分がまず生じる。欲望を満たすということは時間に即時的なものであるから、欲望を充たせないものは時間的即時性から外される。つまり、それらは欲望を充たすために、今まで直接的に手にできた欲望の対象を、「いま」でない時間に持ち込まなければならない。このことが言語化の過程を生み出す。

今まで、不快時には泣き叫ぶことで欲望の対象を手にすることができた乳児も、より多くの欲望をより素早く充たすために、泣き叫ぶという快・不快の生理的反応や表現を止め、文化的規則に即した言語、つまりコミュニケーションの道具を使いだす。この道具の使用は、まず意味するもの・ことば・文化的コードを身体に登録しなければならない。その音のパターン signifiant を大脳の言語野の音のパターン認識機能や運動野に刻み込み、それに基づいて身体の運動、つまり声帯の運動を可能にする。そして、その音は当然、意味されるもの signifié として大脳に言語野の意味のパターン認識機能に登録され、視角野のパターンとのシナップス結合を作りだし、そこに référence が生み出される。つまり、脳の大脳の神経細胞のシナップス結合として、もしくは声帯の筋肉運動のパターンとして蓄積された情報がこの道具つまり言語なのである。それらは自我の外にあった規則、文化的規範を身体化する過程、つまり言語習得過程を意味する。

言語習得過程とは、ものが現れる過程である。フロイトによれば自己と他者の区別のつかない自我の世界では、快・不快の身体的反応はちょうど生理的反応のように、欲望の対象は身体内部にあると考えられる。だから欲望の対象である母の乳房も彼の身体内部のものに過ぎない。それが、自己の外に現れはじめると、生理的に「泣き叫ぶ」ことで指示していた「乳房」が「ママ」と言う音で指示される。この「ママ」のことば・コード化された記号を通じて乳児は母に自分の欲望を伝えることができた。かれは母から欲望の対象を貰うことができる。

言語習得過程とは、ことばというコードに刻まれた文化的規範の身体的登録であるから、ちょうど楽譜を記憶して演奏するように、楽譜という音楽の基礎やそれに基づいて楽器を演奏する技術を学ぶ。それは文化的規則の学習である。その規則に従って音楽を奏でるように、幼児も声帯を震わして「ママ」という音を奏でることになる。す

ると楽譜は文化的産物としてすでにその規則が確立しているコードであり、それに則して音楽的コミュニケーションがなされているため、そのコードから意味するものは空気の波長として生み出される。もはや欲望の対象を手にするために生理的に反応し泣き叫ぶ必要はない。すでに決まっている文化的規則に従い、その手段を呼び起こすことによって欲望の対象を得る目的を実現する事ができる。

言い換えると、そこでは時間がすでに過去から系統的に呼び起こされている。ことばを話すことは、すでにある規則の発生した過去の時間を欲望する主体の現在に持ち込んでいるのである。コード化されいる文化的記号を欲動活動のための道具にした瞬間に時間は作りだされる。その時間は、生理的時間ではなく、文化的時間である。ことばを話すことによって過去に文化的に蓄積された時間、つまり共時的時間は、現在という時間に呼び戻される。それは意味するものに記憶された時間である。

### 3-5、量 Quantité の発生とは何か

以上議論してきた、極性化 Polarité、質 Qualité、空間 Espace、時間 Temps の発生が起こると、世界は原始的な快・不快、自己・非自己、ここ・ここでない、いま・今までないの二元論的世界からその双方に多様化された世界が広がる。つまり、それが量 Quantité の出現に繋がると考えられる。

快感原則でのみ機能し、第一ナルチシズムでのみ活動をしていた自我にとって自我以外の世界はない。ここではその自我とそれ以外は「存在しない」世界の二つである。もちろん、この場合は、まだ極性化 Polarité や質 Qualité、空間 Espace そして時間 Temps の発生も考えられない世界である。その世界をここでは一つの世界であると考えられる。この世界が、「快・不快」や「自己・非自己」、「ここ・ここでない」、そして「いま・今までない」の二元論的世界に分離することによって、「まったく存在しない」世界 nulle と「すべて存在する」世界 tout つまりそれは nulle にたいして存在するものは全てであるから、ここでは存在する世界を tout として表現した。その二つが先ず分離する。つまり、「すべて存在する」世界 tout とは、世界が、「快」や「自己」、「ここ」、そして「いま」の世界であり、まったく存在しない世界 nulle は、「不快」や「非自己」、「ここでない」、そして「今までない」の世界となると考えられる。

これらの二元論的世界の出現によって、ナルチシズムは現実の世界では充たされることはなくなり、そのため、不快によって外的空間は広がり、過去も未来という時間も長くなるのである。

次々に発生する全知全能の自我を否定されるという不快、第一ナルチシズムが機能が阻止するために生じる不快を自己以外のある所に閉じ込めようとするために、外的世界の広がりはますます必要になった。この広がりこそ、世界の多様化を自我の内に認めた姿を意味する。自己しかなかった世界に、二人称が生み出され、それが三人称となる。そして他者は家族の構成メンバーから、ますます外に広がっていく。広がりを受け入れることは、多様な世界を受け入れたことを意味する。その受け入れに従って相対的に自我の位置もますます小さくなるのである。

一人称代名詞「私・Je」が形成された時、半対象的世界 semi-objectal の「まったく存在しない」世界 nulle と「すべて存在する」世界 tout の二つ世界像が終わりを告げる。言い替えると、ブール代数の世界の様に、一とそうでないゼロの世界のようう二元論的世界は終わりを告げ、一人称代名詞「私・Je」が、自己の主体を三人称化された自己として示すことになる。それは、個人の社会化の過程で現実を受け入れますます小さくなった自分を象徴する命名なのである。

その時、数詞も進化する。代数の世界には一と二とその次の数である三が生み出される。例えば北アフリカの社会では今でも数え方として一と二とその他と三つしかないらしい。それは人類が進化の過程で見つけだしてきた世界の在り方の残像が今も残ってる非常に興味深い文化人類学的例である。

人類はどのようにして数の概念を見つけだしたのだろうか。すでに数の概念があった古代ギリシャ数学やユークリッド幾何学の形成を考えると、古代エジプトや古代バビロニアの計量技術は、例えば三角測定法で導く角度と長さの関係は、形と形の関係が前提になって出来上がった概念であることに気付く。言い換えるとこの場合では量的関係は形と形の差異から導かれたのである。この例からも Quantité を導きだすために Qualité の概念の差異が必要であったことが理解できる。そして、二つ形の変化、つまり三角形の二つの角度の変化とその間の辺の長さ(形)との関係を求めるこによって、二つの角度からのがる二つの直線の交わる角度(形)とそれらの長さの質的な関係

(形)を前提にして、測定したい辺の形の関係を比例的に導くのである。

形の比例関係を量的関係の表現にすることは数学的な概念の中では革命的なことであった。何故なら、比例という原始的で視覚的な量の関係が、数詞という抽象的な量の関係に展開したからである。そこには数詞という言語が形成されなければ不可能である。この数詞の形成も形の比較によって導かれたのである。つまり、一次元の長さという形の変化を、ある形を基準にして比較することによって、その基準単位の形が繰り返されるという概念から1に対して2という数の概念が生じるのである。一次元の形の変化の差異のある単位の形を仮想することで、その仮定された形の繰り返しとして数の概念が生み出され、一次元の形との比較の言語が質的な形容詞から基準単位の形の繰り返しを基本とする言語に置き換わったものが、数詞の起原であると解釈できる。

さらに注目したいのは、この抽象的な数詞によってユークリッド幾何学が解釈されるデカルトの代数幾何学の形成である。この代数幾何学の形成は数学的なことばが世界の解釈を可能にする時代の入り口を作ったことを意味する。それまでは数詞と形の関係は原則的には一次元の形の比例関係として説明されていたが、デカルトは数の概念は、形の作る次元付属物ではなく、数が完全に形から独立に存在するものであると考えた。数詞がそれぞれの次元に独立して存在するということは、数詞の概念が形の比例関係という直感的な世界から、さらに抽象化された独自の概念として成立していることが前提となっている。そのため、空間のある位置が三次元の数詞によって表現できるようになった。

さらに数詞の抽象的な概念が発展し数学が現代物理学など直接観察することのできない世界の解釈言葉に発展した。数学の言葉がさらに高度な抽象的表現を可能にするためには感覚的な直感の世界を基盤とする数学言語が視覚的常識から抜け出した観念的世界を表現できる言語に発展する必要がある。例えば現代物理学の基礎的な数学を作り上げるコーシヤリーマンの位相幾何学では、数は連続した1と0の空間にあり、そこに無限の概念が含まれることになり、連続空間の表現が可能になる。その表現を量子力学に活用することができた。また、ブール代数の数の概念は、存在の論理的関係が1と0の数として抽象化されるために、形式論理学の表現を計量的に示し、情報科学の数学的基礎を作り出すことができた。

量 Quantité の概念は、自我が社会化する過程で進化する。それは交換の概念の形成や発達過程を意味する。交換とは単に欲望の対象の交換ではなく、その対象の価値という量的概念が他方で付随してきているのである。計量言語の形成は高度な分業社会に至って、作りだされた言語体系である。数詞とそれらの数詞間の規則である算術は、文法の形成の後に生み出された規則であると言える。

## 4、自己組織系の言語科学としてのシステム言語学の可能性

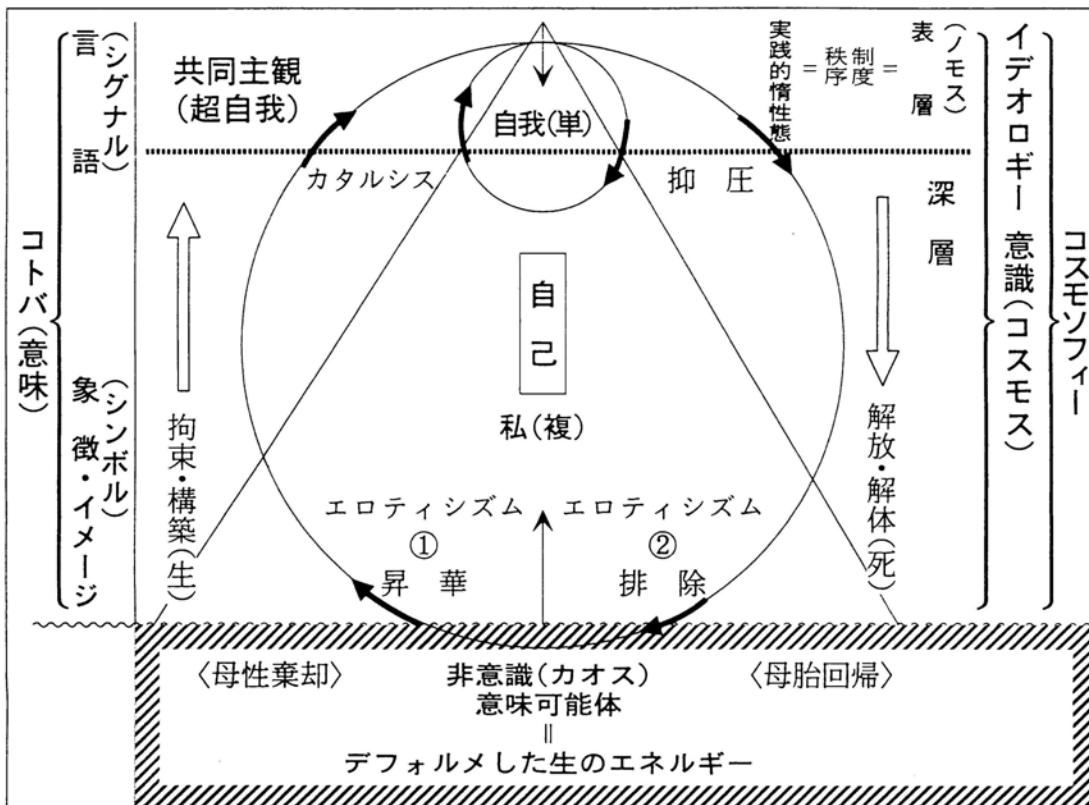
### 4-1、吉田人工物システム科学原論と丸山言語学の接点

吉田民人は自己組織系の情報科学の理論<sup>30</sup>を一般化し、情報界と資源界からなる人間社会のすべてを対象とするシステム論を人工物システム科学として提案している<sup>31</sup>。その科学理論が展開する「法則領域」、「Signal プログラム領域」と「Symbol プログラム領域」と「それぞれの境界・初期条件」からなる「三層システム理論」提案している。そこで、我々の進めたシステム言語学の構築の作業を、吉田民人の人間社会学の基礎理論としての「人工物システム科学原論」の提案に照らし合わせながら、自己組織系の情報科学としてシステム言語学の成立する条件を検討する。

システム論的言語学の起原は、筆者が1993年に発表したフロイト精神分析学のシステム論的解釈、つまり自我の構造を抑制と欲動から生じる精神エネルギー的対立関係から生み出される運動状態のバランス形態とする解釈<sup>32</sup>と丸山圭三郎がソシュール言語学の分析や解釈から導き出だした丸山言語学の基本概念を構成する「生の円環運動」にある<sup>33</sup>。

図6 生(=死)の円環運動 丸山圭三郎 『ホモ・モルタリス-生命と過剰・第二部』 P143

## 生(=死)の円環運動



◎コトバ(langage)が言語(langue)を包摂するように、自己は自我を包摂し、コスモスはノモスを包摂する。この図は、ヒトの個体・系統のモデルであるが、おそらくは、このミクロコスモスが、ピュシスとしてのマクロコスモスに包摂されるであろう。

丸山圭三郎は、図6に示すようにラングとランガージュの関係を二つの要素の対立的存在として考えたのでなく、ランガージュ自体がその表層意識において物象化された姿、ラングと深層意識において絶えず流動する姿、つまり動きつつあるゲシュタルトの姿とともに有していると考え、欲動・カオスとコトバ・コスモスの回転運動・生の円環運動を『ホモ・モルタリス-生命と過剰・第二部』の中で提起した。この考えから、欲動とよばれる精神エネルギーを土台に内的世界の運動によって営まれる価値、表象、言語の体系のゲシュタルトと外的 world の構造、文化、社会システムの体系の形態は相補的な関係として存在していることが理解できる。

さて、この丸山言語学が示す「生の円環運動」を前提にし、吉田民人の自己組織系の情報科学としてのシステム言語学を構想する。自然言語系は吉田民人によると「狭義の情報」と定義されている。その秩序プログラムは「Symbolic プログラム領域」に属することになる。このプログラムによって処理された世界・人工物が、社会的人工物、つまり家族、企業、国家、国連などの社会・経済システムや精神的人工物、つまり科学的知識、価値観、宗教、文学、芸術など文化システムであると吉田民人の述べている。これらの人工物は自然言語によって作り出されたある文明や歴史に依拠した価値・表象・言語の体系、つまり共同主観・イデオロギーを構成する。それが、超自我とよばれる文化的抑圧の構造、つまり制度や規範を作り出し、その文化的記号・シグナルによって、自我は言語情報を処理するプログラムを形成し、自我の構造を作り出すのである。その自我の構造によって、入力される情報は処理され、処理された情報によって、人工物が再生産される。丸山圭三郎も、図6に示すように、「生の円環運動」を提起することで、吉田民人と同様に文化的シンボルと文化的シグナルの相互の運動を示している。

#### 4-2、ランガージュからラングへの過程の解釈

システム論的言語学の視点は、言語学の課題がいわゆることばの構造を語学的分析に留めないことを前提にして、言語学の課題をコトバ・ランガージュ・言語精神活動の課題にまで展開しているところにある。文化的シグナルと文化的シンボル化の相互の循環の過程に関する分析は、ことばの分析が統辞的・意味論的分析に留まらないことを示唆している。マルクス・廣松渉が指摘した商品の物象化の過程が課題になる。生産された文化的象徴はそのシグナルを所有することで、生産物の具象性から解放され、欲望の対象物としての商品に化ける。そして、この化身こそ交換過程の原動力として機能するのである。

ことば・文化的記号という文化的に生産された交換物に指示されたものとコトバ・自我の精神活動と呼ばれる文化的観念形態との相補的関係が、二つの概念の運動形態、つまりここでいうシステムとして存在することによって説明可能であるとことが、システム言語学の成立の条件となっている。その形態は図7の(1)と(2)で示す言語精神活動から象徴的意味の成立過程(1)を経て文化構造・言語化の過程(2)に至る経過を意味する。この過程は、まず言語活動が第一過程精神活動の中で、ナルチズムによって導かれる欲動活動として発生する。その無意識や深層での精神言語活動は欲望の対象の象徴的意味に結束しながら、文化的規範や現実則に即して、コミュニケーション可能なことばとして昇華される。コトバがことばになる過程には抑制する超自我の存在が必要である。それは、社会的規範や規則の存在と合同関係にあると考えてよい。

コミュニケーション可能な形態に強制されたナルチズム的欲望は、言語精神活動が本来もっているゲシュタルトのゆらぎ構造を抑制し、コミュニケーション可能なことばとして表出す。つまり、第二過程を通ることで、多様化する「意味するもの」と「意味されるも」の関係を抑圧することによって、通時のゲシュタルトゆらぎ現象を最小限に食い止める。「意味するもの」のシグナルは交換関係を可能な文化的記号のコードとしての機能を持つことになる。言語精神活動・ランガージュの対象とは欲動の方向性とその活動力によって構成されているため、欲望の対象は欲動主体の精神活動の中にある。つまり、それらは、欲望とよばれるある何ものかに取り付かれた情念や感情として存在している。

しかし、第二過程の機能によって、この対象の中から、ナルチズムが取り去られ、脳の内部からの刺激によって生じる知覚パターンの反応は極力抑えられる。そのため、指示は感覚器官が外部的刺激によって受けた脳の知覚分野の受けた反応として現われる。指示は、あたかも外的世界の存在様式の反映として認知され、意識世界での対象認識は外的世界の反映の様相をまといながら現われる。

ことばは、外的世界の対象認識パターンとしての指示、「意味するもの・文化的記号」とそれらの意味するものの間に生じる差異から生じる「意味されるもの」の三つの相補的要素の関係式が作り出す精神的活動の形態であり、その文化的形態である。この過程を図7の(2)に示す。この過程は交換可能な意識の発生過程を示したものである。ことばは文法的な規則性や意味的に定義された限定性を所有することになる。例えば、生活世界の対象は生活する主体の欲望・自我の保存と個体の保存を目指す欲望の対象である。しかし、その欲望とよばれる精神活動を感じることなく、生活情報として生活資源のパターン化による事象的世界の認識世界として現れている。表象化過程の中で認識主体の欲望性は中性化し、事象としての世界が現れることになる。その現れを作り出すものが、抑制と呼ばれる文化的規則性であり文法やコミュニケーション可能な「意味されるもの」と「意味するもの」の対応関係の成立なのである。

また、この過程では、話す主体の精神活動と切り離されない言語精神活動の一部であるパロールが、話す主体の精神活動主体と切り離され、音のシグナルとしてコード化された状態に置き換えられる。話す主体から発声された「意味するもの」は、特定の個人の話す行為によって決定された音のシグナルではなく、文化的に規定された音のシグナルとして、登場する。確かに、個人的に発声の違いはあるものの、音のシグナルは、共通の信号として登場することになる。

#### 4-3、ラングからランガージュへの過程の解釈

図7に示す(3)と(4)の過程は、外化された身体構造や精神構造、つまり社会身体・文化や制度と呼ばれるものによって、精神構造が再生産される行程である。我々の精神構造は文化的構造に登録されながら形成される。その機

能を担うものとして、パロールがある。本来ナルチシズム的な自我が言語を修得するのは、そうしなければ自我が生存できないと理解したからである。図6の丸山圭三郎の示すモデルの中ではこの過程は深層化し母胎回帰する過程として示されている。その過程を導く力こそ超自我の抑圧機能である。規則性を自我の構造に持ち込むことで、自我を維持しようとする第二過程の精神機能が形成される。その働きは超自我の形成によって導かれたものである。抑圧の機能がなければ自我は規則性を取り入れようとはしない。この抑圧機能が働いて可能になる言語修得過程の中で、文化的規則性が語学的規則性を通じて、精神構造を作り出す。

その場合、意味するもの(Signifiant)から伝達される象徴的意味がメッセージとして含まれている。このシグナルの登録は当然、他者性や文化的構造を自我の中に刻み込むのである。パロールから伝わる音声や表象から伝わる指示のシグナルが象徴化する(Symbolisation)過程を図7の(4)に示す。この過程の前に、自我がそれを取り巻く表象や指示のシグナルを受け取る機能を持つ必要がある。その過程を図7の(3)に示す。この過程では、自我が共同主観的世界のなかで生存する経験をもつことが前提となる。丸山圭三郎は、この過程を図6のモデルの中で実践的惰性態として述べている。つまり、共同主観的世界の価値・表象・言語の体系としてのイデオロギーに支えられ、その中で自我の自己認識を可能にし、自我の生存を可能にしている状態を意味する。それは、習慣や風習を受け入れ、社会的規範に即して生活することを意味するものである。

この過程では、事象的世界からのメッセージ、つまり表象や指示のシグナルに対する自我の従属的生活態度・実践的惰性態が形成されている。我々を取り巻く生活世界は過去のそして現在の人間の労働によって生産されたものの蓄積によって構造化された世界、つまり吉田民人のいう人工物の世界である。我々は好むと好まざるに関わらず、自我を保存し、生存している以上、人工物の世界に守られて生きなければならない。その人工物とは、蓄積物・文化や社会資本と呼ばれる過去の労働であり、それらが現実に文化的社会的機能として働いて以上、それらの生産物の意味やシンボルは、その事象の指示としてもしくは表象としてシグナルを発し続けている。これらの人工物の機能と構造のシグナルを情報とよぶ。つまり人工物の資源の文化的社会的観念形態・パターンがその情報の形態なのである。言い替えると、人工物とはそれが文化的社会的機能性をもつ以上、そしてその機能性が取り出される以上、そこでその人工物の指示は「意味するもの」として登場することになる。

しかし、その意味するものはその機能として意識世界に登場するとは限らない、それらはある場合には、トーテムの分析をフロイトが行ったように、隠喩や象徴として無意識世界へメッセージを投げかけるものもある。この意味するもの、文化的記号のシグナルとしての人工物の姿こそ、事象世界のもつ共同主観的構造なのである。そして事象認識を通じて、それらの共同主観的観念形態は、自我の深層に食い込み、自我に登録されるのである。この過程が図7に示す(3)と(4)の過程である。

#### 4-4、生命活動系の中での神経系情報活動と欲動活動の回帰運動

自己組織系のシステム言語学の成立条件は、図6で示した丸山圭三郎の生(=死)の円運動のモデルや、我々が図4で示したラングとランガージュの回帰的運動のモデルだけでは説明がつかない。そこで吉田人工物システム科学原論の構想を援用しながら図7の社会文化活動系、生命活動系と物理・化学的運動系の三層構造モデルを提案する。

言語精神活動の土台となる生命活動のシステムは、ラングとランガージュの自己組織的な回帰運動のシステムと関連しなければならない。この回帰運動とは、言語として構造化されている欲動活動の Symbole プログラムによって生じる生理的要要求活動と、欲動活動の Symbole プログラムを構成する神経系情報活動の生理的反応形態である Signal プログラムによって生じている。

脳神経生理学の視点からの言語活動に関する研究で Signal プログラムは取り扱われ、脳の言語野での言語活動機能の分極図の解明作業がなされたり、また他の視覚野、聴覚野や運動野との連携関係についても研究がなされている。Signal プログラムの研究は言語構造の分析のように「意味するもの」と「意味されるもの」の Symbole 的関係についての研究ではなく、神経生理的な情報交換のシステム研究、例えば神経伝達物質やその信号伝達のメカニズムの解明などの神経伝達情報の Signal プログラムを作り出す物理・化学的法則に関する研究が課題になる。

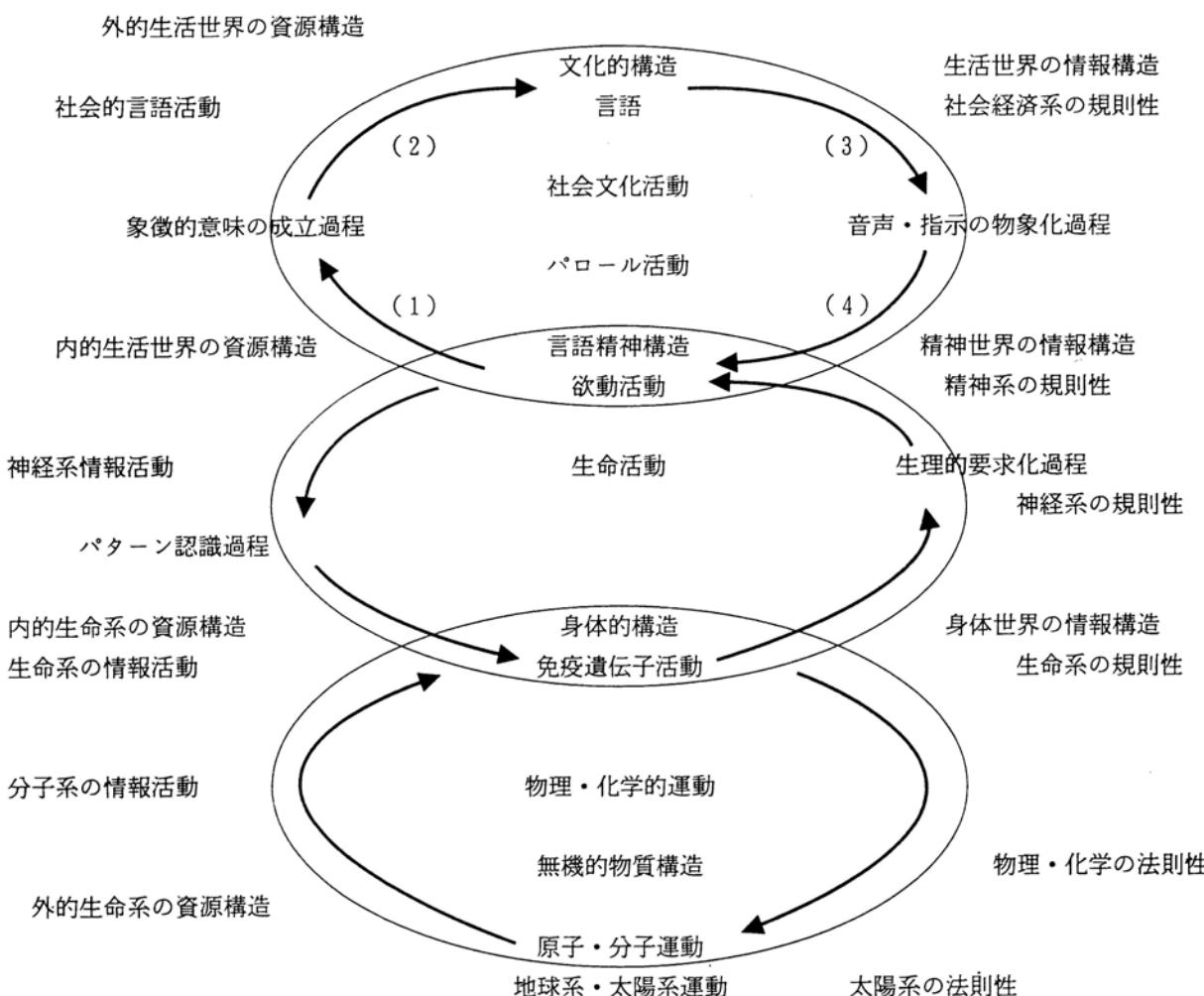
この神経伝達情報の Signal プログラムも身体の細胞構造が所有する遺伝子情報によって規定されている。遺伝子によってプログラム化されている身体構造を土台にして、その維持のための生理的反応が生み出される。これら

の反応は個体の維持のための行動的反応や言語的反応の土台を作り出す。

これらの生理的要求の過程とパターン認識過程は、共に脳神経系のプログラムからのアウトプットとそのプログラムへのインプットの相補的な相互活動によって構成される。人間の場合、それらの生理的要求は単に身体的な反応ではなく、欲動とよばれる文化的に構造化された身体や自我の構造の中で発生する自己機能の維持や複製の運動である。生理的要求を充たそうとする行為は、すでに言語活動として構造化されている。人間の生理的要求過程は欲動として現れるのであるが、それらは具体的な表象や感情の発生を伴うものであり、神経系の秩序や規則性に即しながら、自我の維持を目的にした行為が引き出される。

身体的な活動は、その全体的な機能において文化的であるが、部分的機能に於いては生物的である。つまり、細胞レベルでは人間と他の動物は遺伝子の内容は違ながらも遺伝子によって作られている同じ細胞の形態をもつ存在である。しかし、動物行動学的なレベルでは人間と他の動物とは非常に異なる。この第二層の生命活動系は、人間としての個体の全体的システムの固有性が第一層に隣接し、細胞レベルの生物システムが第三層の物理化学的活動系に隣接して構成される。

図7 自己組織系のシステム言語学の成立条件に関するモデル



第一層の社会文化活動系と第二層の生命活動系の二つの相互関係は、文化的構造としての情報構造、つまり言語と生物的な情報構造である遺伝子構造との関係を示したものである。遺伝子の構造とその秩序プログラムは生命活動系に普遍的なシステムとしてあるのに対して、文化的構造やその秩序プログラムは人間の社会文化活動に固有のシステムである。

#### 4-5、物理・化学的運動系の中での個体の誕生と死の回帰運動

生命活動系は、生命維持のための細胞レベルの自己組織活動と身体機能と個体保存のための自己組織運動によって作られている。生命はミクロ的には細胞増殖の活動、マクロ的には生殖活動を繰り返し、個体保存と種族保存の活動を確立している。この活動は物質的には生物化学的な代謝によって成り立っている。

この生物化学的な活動は、第三層の物理・化学的運動系にその基盤を置いている。つまり、第二層の生命活動系を構成する単位である遺伝子の資材を第三層から取り出しているのである。つまり、生命の誕生や代謝に必要な素材を第三層から取り出し、そして個体の死や代謝によって発生した廃棄物を第三層に放出しているのである。第二層の生命活動系の自己組織性を維持するために生体素材の代謝や、個体の生と死の循環運動を繰り返すために生体の発生、成長、増殖、分解、消滅の過程を支える資源的環境、生態環境システムとして第三層の物理・化学運動系が存在している。

第三層の物理・化学的運動系は原子とその化合物である分子の構造の世界の法則によって成り立つ。また、それらの法則によって生じる原子や分子の運動の規則性によって、物性とよばれる情報構造の原形を作り出している。つまり、情報の定義である物質のパターンとは物質の運動のパターンでもある。例えば、原子振動は分子内の原子核の規則的な振動運動であり、時間を決めるためにその規則的なパターンを我々は利用している。

第三層の物理・化学的運動系を基盤にして、第二層の生命活動系の素材は作られ、第一層の社会文化活動系の人工素材、つまり科学技術を駆使して作られた全ての人工物の素材はこの第三層の物理・科学的運動系の法則を活用したものである。第一層の社会文化的構造、つまり道具、機器、機械、施設、生活用具とよばれる人工物の構造はその文化的身體構造を言語情報によって構造化されているのだが、その物性的な構造は第三層の物理・化学的運動の法則性によって維持されている。

### 5、問題提起 システム言語学の成立のための課題

#### 5-1、人工物システム科学原論の中での自己組織系の言語学のモデル化

システム言語学を提案するために、図7で示すシステム言語学成立条件である三つの自己組織系の連鎖運動を提案する。第一層は社会文化活動領域を支配する自己組織運動、第二層は生命活動領域を支配する自己組織運動、そして第三層は物理・化学的活動領域のエネルギー変換の法則を前提として成立している熱力学第一法則・エネルギー不变の法則である。これらは、相互に関連し合いながらも、それらの三つの層自体が独自に自己組織的な回帰運動を行っている。この三層の連鎖のモデルを前提にして自己組織系の言語学が成立していると考える。

図7は、この自我のパロールの活動や社会文化活動を通じての、自我の言語機能の登録・生産と再登録・再生産過程を示した。この過程は、図6の丸山圭三郎の示す「生(=死)円環運動のモデルに類似している。そして、吉田民人の人工物システム科学原論の示す三層システムの定義に照らし合わせて解釈すると以下のことがいえる。

図7で示す社会文化活動はその秩序プログラムによって処理されたものであり、それはSymbolプログラム領域に該当する解釈でき、また、生命活動は、その秩序プログラムによって導き出されたものであり、Signalプログラム領域に属する。その境界にランガージュの構造を決定する、意味するものを構成する音声的記号や指示を構成する視覚的記号の形成に関する規則がある。つまり、そのことを一般にパターン認識とよんでいる。さらに、この生命系は物理・化学的法則性を前提にして成立していると考えられるので、その系に相互作用している物理・化学的運動の系を考える。この物理・化学的運動の系は自然法則によって動いている。

ここでいう法則の用語は、特にポスト構造主義など現代哲学の流れの中で、科学的実正主義やそこから生じる実在論への批判の結果、自然世界の規則性を名目的形態や共同主観的解釈として位置付ける流れの中では、適當なことばではないと言われる可能性がある。そこで、この法則を、自然現象がもつ規則性を逆説的してもそれを抜きに世界の解釈が成立しないという否定不可能性に成り立つ規則であり、それをここでは自然法則と考える。つまり、この図7の示すシステム言語学の成立条件に関するモデルは吉田民人の人工物システム科学原論のパラダイムの中に位置付けられる言語学であることが想定される。

## 5-2、自然言語系プログラム科学基礎論(システム言語学)の形成に向けた学際的研究課題

これらのラングとランガージュの回帰運動モデルや精神言語活動の発生論的モデルを証明する為には、言語心理学との共同研究が必要である。つまり、すでにピアジェらの研究で示されているように、発生学的認識論から言語過程の問題を考えたり、また、Lois Bloom が「Language Development from Two to Three」で示すように、論理的表現の発生過程を実証的に研究し、その仮説を説明する必要がある。

同様に、言語の起源について、すでに考古学的研究や文化人類学的研究がなされている。言語の進化過程を問題にするなかで、ラングとランガージュの回帰運動モデルや言語活動・ランガージュの発生論的モデルを証明する機会を作ることも可能である。例えば、「言語と意識の起源」を書いたトランデックタオが、モデルとして示した機能言語について今後検討を加える必要がある。

以上はあくまでも今後の課題に関する研究の可能性を述べたものであるが、このラングとランガージュの回帰運動モデルやランガージュの発生論的モデルは今後具体的な語学としてのフランス語表現方法の研究と同時平行的に進められるものである。

また、色々な言語について、それぞれの表現方法の在り方や意味論を比較することで、語学間の共通する構造とその違いを問題にする研究がなされていると考えられる。

例えば、Anna WIERZBICKA の著書である「Semantics」はその一つであるが、異なる言語での記号と意味との関係を比較することによって、言い換えると Sémantique typologique の機能を研究することによって、文化的の違いが影響する表現の在り方について言及できる可能性がある。例えば、Edmond ORTIGUES は著書「Le discours et le symbole」、宇波彰訳「言語表現と象徴」の中で、インドヨーロッパ語と中国語の数詞に関する表現方法について比較している。この比較を通じて、言語現方法の根底にある精神構造の比較分析を試みている。

これらの研究は、ランガージュの構造を文化的に理解する糸口を提起すると思われる。

言語学に関する学際的研究の目的は、人間社会学が、吉田民人の理論を援用して言及すれば、自然言語系の Symbole 記号のプログラム科学として解釈することにある<sup>34</sup>。つまり、文化、社会、集団、心理、精神などの人間社会現象は、Symbole 記号によって生み出されるとして理解し、それぞれのプログラムの解明とそれらの相互の関係が学際的な課題として展開されると考えた。そして、自然言語系 Symbole 記号プログラム科学基礎論としてシステム言語学の形成には、必然的にこれまでに発展してきた人間社会諸科学との学際的な研究課題が提起されることになる。

## 参考文献

- Bloom (Lois), *Language Development from Two to Three*; Cambridge University Press, 1991, 514p.  
Bluveresse (Jacques) *Philosophie Mythologie et Pseudo-science* 『哲学・神話・疑似科学』中川雄一訳 東京、国文社 1997年2月、236p  
Charaudeau (Patrick), *Grammaire du sens et de l'expression*; Paris, Hachette Education, 1992, 927p.  
Croft (William), *Typology and Universals*; Cambridge University Press, 1990, 311p.  
Goldberg (Adele E.), *Constructions*, The University of Chicago Press, Chicago and London, 1995, 265p.  
Fauconnier (Gilles) & Sweetser (Eve), *Space worlds and grammar*; The University of Chicago Press, Chicago and London, 1996, 355p.  
FREUD (Sigmund) *Oeuvres complètes*, psychanalyse, directeur de la publication, André Bourguignon- Pierre Comtet, Directeur scientifique Jean Laplanche, Presses universitaires de France 1989. Tome1 1886-1893, Tome2 1893-1895, Tome3 1896-1899, Tome4 1899-1900, Tome5 1901, Tome6 1901-1905, Tome7 1905, Tome8 1906-1908, Tome9 1909, Tome10 1909-1910, Tome11 1911-1913, Tome12 1913-1914, Tome13 1914-1915, Tome14 1915-1917, Tome15 1916-1920, Tome16 1924-1925, Tome17 1926-1930, Tome18 1931-1936, Tome19 1937-1939, Tome20, Tome21, Glossaire et index.

- 飯田隆編 『ピッドゲンシュタイン読本』東京、法政大学出版会、1995年10月、382p  
Jones (Michael Allan), *Foundations of French syntax*; New-York, Cambridge University Press, 1996, 557p.  
JITSUZONSHISOKYOKAI 実存思想協会編 『ことばと実存』東京、以文社、1993年6月、171p.  
岸田秀 『幻想の未来』東京、河出書房新社、1985年1月、235p.  
LACAN (Jacques) *Ecrits* 「精神分析における言葉と言語活動の機能と領野」竹内迪也訳 in 『エクリ1』宮本忠雄他訳 東京、弘文堂、1973年5月、pp321-448.  
LAPLANCHE (Jean), PONTALIS (J.-B.), *Vocabulaire de la psychanalyse*, sous la direction de Daniel LAGACHE, bibliothèque de psychanalyse dirigée par Jean LAPLANCHE, Paris, P.U.F., 1ère édition 1967, 5ème édition 1976, 523p.  
丸山圭三郎 『文化記号の可能性』東京、日本放送協会、1983年5月、228p.  
Ortigues (Edmond), *Le discours et le symbole*; 『言語表現と象徴』宇波彰訳 東京、せりか書房、1970年.  
Taylor (John R.), *Linguistics Categorization, Prototypes in linguistic theory*; Clarendon Press, Oxford, 1995, 312p.  
Vygotsky (Lev), *Thought and Language*; The MIT press, Cambridge, Massachussets, London, England, 1986, 287p.  
Wierzbicka (Anna), *Semantics, primes and universals*; New-York, Oxford University Press, 1996, 500p.

## 引 用 文 献

- 
- <sup>1</sup> SARTRE (Jan-paul) *Question de la méthode*, Paris, N.R.F. Gallimard, 1960, 197p  
<sup>2</sup> MITSUISHI Hiroyuki, VAN DROM Eddy "Exemples concrets du modèle de langue dans la langue française" (仏文)、『金蘭短期大学研究誌』、第29号、1998.12、pp61-79.  
<sup>3</sup> 三石博行 VAN DROM Eddy 「フランス語表現に於ける Existence 構造について」in 『1998年 日本フランス語フランス文学学会研究発表要旨』、1998.6、p36  
<sup>4</sup> 三石博行 VAN DROM Eddy 「フランス語表現の基盤にある Parole 構造について」in 『フランス語フランス文学』No73, 日本フランス語フランス文学学会、1998.10、p108  
<sup>5</sup> MITSUISHI (Hiroyuki) *DÉCONSTRUCTION ET RECONSTRUCTION DE LA MÉTAPSYCHOLOGIE FREUDIENNE - ESSAI D'ÉPISTÉMOLOGIE SYSTÉMIQUE -*, Lille, Atelier National de reproduction des thèses à L'Université de Lille, 1993.5, pp72-115,  
<sup>6</sup> 三石博行、VAN DROM, Eddy 「フランス語におけるパロールから象徴的意味・前論理的表現への過程について」in 『フランス語フランス文学』、No74、白水社、東京、1999.10、121p.  
<sup>7</sup> MITSUISHI, Hiroyuki et VAN DROM, Eddy " Sur les expressions logiques d'opposition dans la langue française" (仏文) in 『金蘭短期大学研究誌』、第28号、大阪、pp153-183, 1997.12.  
<sup>8</sup> MITSUISHI Hiroyuki et VAN DROM Eddy " Exemples concrets du modèle de langue dans la langue française" (仏文)、『金蘭短期大学研究誌』、第29号、大阪、1998.12、pp61-79.  
<sup>9</sup> MITSUISHI Hiroyuki et VAN DROM Eddy " Approche linguistique de la causalité dans la langue française" (仏文) in 『1999年 日本フランス語フランス文学会秋季大会 研究発表要旨』、1999.10、p3  
MITSUISHI, Hiroyuki et VAN DROM, Eddy " Classification des marqueurs principaux exprimant la causalité" (仏文)、in 『金蘭短期大学研究誌』、第30号、大阪、pp75-98.  
<sup>10</sup> MITSUISHI Hiroyuki et VAN DROM Eddy " Analyse du domaine linguistique de l'intention dans les expressions françaises " (仏文) in 『1999年度日本フランス語フランス文学会関西支部大会 研究発表要旨』、1999.11、p2  
MITSUISHI, Hiroyuki et VAN DROM, Eddy 「目的 (but)・afin deの表現に関する意味論的分析」 in 『関西

- フランス語フランス文学』、第6号、青山社、京都、2000.3
- <sup>11</sup> 三石博行、VAN DROM, Eddy 「意図(intention)・主体的目的 (but) や達成的目的(destination)を示すフランス語表現に関する分析」 in 『金蘭短期大学研究誌』、第31号、
- <sup>12</sup> 三石博行、VAN DROM, Eddy 「CORPUSによる検索と質的変動指標による口語及び文語表現の傾向分析」、in 『2000年 日本フランス語フランス文学会春季大会 研究発表要旨』、2000.5、p17  
三石博行、VAN DROM, Eddy 「CORPUSによる検索、質的変動指標と信頼係数 $q$ による口語/文語表現傾向分析方法」 in 『フランス語フランス文学研究』、No75、白水社、東京、2000.10.
- <sup>13</sup> SAUSSURE (Ferdinand de), *Cours de linguistique générale*, Edition critique préparée par Tullio de MAURO, Payot, 1987, 520 p
- <sup>14</sup> 朝倉李雄 監修 富永明夫 鈴木康司共著「構文 SYNTAXE」 in 『COURS STANDARD DE LANGUE FRANÇAISE 7, COMMENT LIRE? ・スタンダードフランス語講座 7 解釈』、東京 大修館書店 1972年 4月 96-154pp  
朝倉李雄 監修 福井芳男 丸山圭三郎共著「Leçon 37, Leçon 38, Leçon 39」 in 『COURS STANDARD DE LANGUE FRANÇAISE 2, STRUCTURES SYNTAXIQUES DU FRANÇAIS ・スタンダードフランス語講座 2 文の構造』 東京 大修館書店 1971年5月 158-169pp
- <sup>15</sup> MITSUISHI Hiroyuki et VAN DROM Eddy "Sur les expressions logiques d'opposition dans la langue française" in 『金蘭短期大学 研究誌』第28号 1997.12 pp153-183
- <sup>16</sup> WITTGENSTEIN (Ludwig) *The Blue and Brown Books Preliminary Studies for the philosophical Investigations*, Basil Blackwell Oxford, 1975, 192p
- <sup>17</sup> 黒田 亘 「「言語ゲーム」をめぐって」 in 『月刊言語』 Vol. 1 No8 大修館書店 1973.11 pp581-588
- <sup>18</sup> 丸山圭三郎 『ソシュールの思想』 東京、岩波書店、1981年7月、pp256-295
- <sup>19</sup> 三石博行 VAN DROM Eddy 「フランス語表現に於ける Existence 構造について」 in 『1998年 日本フランス語フランス文学学会研究発表要旨』日本フランス語フランス文学学会、1998.6、p36
- <sup>20</sup> SARTRE (Jean-Paul), *Critique de la raison dialectique*, Paris, N.R.F. /Gallimard, 1960, 755 p.
- <sup>21</sup> 丸山圭三郎 『ソシュールを読む』東京、岩波書店、1983年6月、pp61-100
- <sup>22</sup> 三石博行 VAN DROM Eddy 「フランス語表現の基盤にある Parole 構造について」 in 『フランス語フランス文学』No73, 日本フランス語フランス文学学会、1998.10、p108
- <sup>23</sup> MORIN (Edgar), *L'homme et la mort*, Pairs, Editions du Seuil, 1970, 372 p., Collection Points Sciences humaines.
- <sup>24</sup> FREUD (Sigmund), *Méta-psychologie*, traduit de l'allemand revue et corrigée par Jean LAPLANCHE et J.-B. PONTALIS, *Trieb und Triebschicksale die Verdrängung das Unbewusste metapsychologische Ergänzung sur traumlehre Trauer und Melancholie*, Paris, Gallimard, 1989, 185 p
- <sup>25</sup> TRÂN DUC THAO (Thao), *Recherches sur l'origine du langage et de la conscience*, Paris, Editions Sociales, 1973, 343 p.
- <sup>26</sup> MITSUISHI (Hiroyuki), *DÉCONSTRUCTION ET RECONSTRUCTION DE LA MÉTAPSYCHOLOGIE FREUDIENNE - ESSAI D'ÉPISTÉMOLOGIE SYSTÉMIQUE -*, Lille Université de Lille 1993, pp339-346
- <sup>27</sup> KLEIN (Mélanie), *Essais de psychanalyse (1921-1945)*, traduction de Marguerite DERRIDA, Introduction Ernest JONES dans la traduction anglaise, *Contributions to psycho-analysis (1947)*, introduction à l'édition française de Nicolas ABRAHAM et Maria TOROK, Paris, Payot, 1968, 452 p., col. Science de l'homme.
- <sup>28</sup> 岸田秀 『ものぐさ精神分析』東京、中央公論社、1982年、pp179-180
- <sup>29</sup> 同上、pp173-174
- <sup>30</sup> 吉田民人 『自己組織性の情報科学 エヴォルーショニストのウィンナー的自然観』、新曜社、東京、1990.7、296p
- <sup>31</sup> 吉田民人 「三層システム理論の提案-人工物システム科学原論：Inter/multi/trans-disciplinarity の目指すべきもの-」社会・経済システム学会19回大会、2000.11、

<sup>32</sup> MITSUISHI (Hiroyuki) *DÉCONSTRUCTION ET RECONSTRUCTION DE LA MÉTAPSYCHOLOGIE FREUDIENNE - ESSAI D'ÉPISTÉMOLOGIE SYSTÉMIQUE -*, Lille, Atelier National de reproduction des thèses, L'Université de Lille, 1993.5,580p

<sup>33</sup> 丸山圭三郎 『ホモ・モルタリス-生命と過剰・第二部』、河出書房新社、東京、1992.3、pp133-146

<sup>34</sup> 吉田民人 「21世紀の科学 一大文字の第2次科学革命ー」 in 『組織科学』 Vol.32 No.3, pp4-26